
魔法少女リリカルなのは 欠けた少年

まーしゅ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 欠けた少年

【Nコード】

N6819M

【作者名】

まーしゅ

【あらすじ】

地球、日本、海鳴市。

「愛情」を忘れた少年がとあるロストログア事件に巻き込まれる時、もうひとつの物語が始まる。

魔法少女リリカルなのはの二次創作です。

小説執筆初心者であるため、違和感ある展開など多いと思います。

ですが、完結目指して頑張りたいと思っています。
どうか、よろしく願います。

又、「男の娘」要素を含みます。 苦手な方はご注意ください。

キャラクター崩壊も含みます。

特にフェイト、なのはが好きな方はご注意ください。

当小説では、基本的に特別編扱いとなりますが、クロスしていただける方を募集しております。

なのはの二次創作小説のオリジナルキャラクターさんならどんな方でも大歓迎です。

お気軽にどうぞ。 どうかよろしく願います、はい。

プロローグ（前書き）

さて、結局書き始めてしまいました。

自分の思ったことを文にするのは楽しいですが、大変不安でもあります。

もし変な方向に走り出したら感想などで注意していただけると幸いです。

では、これからよろしく願いますっ！

プロローグ

その少年に欠落した何かがあるとするならば、それは「感情」。

少年、姫宮 遙は私立聖祥大附属小学校に通う小学3年生であるが、幼くして、おとなしくする事を覚えた。

両親は共働きで、実際の所、子供にはあまりかまっていられなかった。

だから、少年は、おとなしく、いい子にすることを覚えたのだ。帰って来たら愛情を受けられると信じて。

しかし、いつのまにかそれが当たり前になった時、親子の繋がりは薄れてしまった。

そんなことがあって、彼から感情はいつのまにか抜け落ちてしまっていた。

このお話は、魔法との出会いが再び少年に心を灯すお話。

プロローグ（後書き）

凄く・・・短いです・・・

携帯からの投稿は大変ですね。

以上がプロローグとなります。

シリアス？いいえ、中身はコミカルなお話にする予定ですよ？（笑

次回から本編スタートとなります。

主人公の設定については、次回以降の本文中で書いていけたらなあ
と思いますが、やっぱり設定を纏めたページは必要なのかなと思
いつつ。

次投稿は出来るだけ早くできるよう頑張ります。

駄文を読んでいただき、ありがとうございます、お疲れさまでした、
もしよろしければ、次回以降もよろしく願います。

出会い（前書き）

さて、初投稿での緊張も落ち着いてきましたので、次話投稿です。
せめてどんな作品が臆げでも分かるくらいには書かないと不安です、
はい。
では、どうぞ。

出会い

はじめは、おせっかいな人だと思った。

その日は、たまたま外が晴れていて、お昼休み、食べる所に悩んだが、折角だからとお弁当を持って屋上で食べることにしてみた。

別に友達などいなかったもので、どこでもよかったのだ。

屋上の片隅に設置されていたベンチのひとつを陣取り、お弁当の包みを開いた。

今日は自分で作ってきたため、なんだか歪なおかずやご飯がつまっているのだが、食べる分には問題ないかなあと思いつつ、食べようとした、その時だった。

「ねえ、ひとり？ 良かったら、私たちと一緒に食べない？」

そう声をかけてきたひとりの少女。

.....これが、僕と彼女の出会いだった。

side
なのは

お昼休み。

私たちは今日も屋上にお昼ご飯を食べに来ていたのです。

でも、いつも私たちが使っているベンチには既に先客がいました。
その姿にはなんだか見覚えがあつて・・・

「あれ・・・？姫宮ちゃん？」

「姫宮は男よ？　なのは」

「あはは、確かに分かりにくいよねえ」

そうでした。姫宮くんは男の子でした。

その筈なのにとても可愛い外見でちっちゃくて、なんだか、うらやましかったり・・・じゃなくて。

「ひとり・・・なのかなあ？」

折角のお昼ご飯なのにひとりじゃ寂しくないのかなあ？

「あのね、アリサちゃん、すずかちゃん。」

「なによ？」

「どうしたの？」

「折角だから姫宮くんも誘ってみない？」

「あたしは別に構わないけど・・・」

「じゃあ、ちょっと行ってくるね」

そうして、私は姫宮くんのもとに行き、

「ねえ、ひとり？ 良かったら、私たちと一緒に食べない？」

――――――――声を、かけたのです。

遥side

特に断る理由もなく、一緒に食べることに。
まずは、自己紹介。

同じクラスなんだけど、話したことなかったから。

「ええと、僕は姫宮 遥。ええと、あなたたちは？」

「私は高町なのは。よろしくね。」

「あたしはアリサ・パニングス。アリサでいいわよ？」

「私は月村すずか。よろしく・・・お願いします」

「よろしく、高町さ」なのは、でいいよ？」「・・・なのはさん、アリサさん、月村さ」わ、私も・・・」・・・すずかさん。」

それから、他愛のない話。

こうやって、何げなく話すのって何年ぶりだろう・・・

「そういえば、遙はいつもひとりだけどさみしくないの？」

アリサさんの問い。

「友達・・・いないから。もう慣れたから大丈夫かな？」

「そ、そうなんだ・・・」

しよんぼりしてしまうすずかさん。

そんなとき、なのはさんが、あっ！と顔を輝かせた。

「じゃあさ、明日も4人で食べようよ！」

「それ、いいわね。遙は大丈夫？」

「別に大丈夫だけど・・・」

「そっか、じゃあ決まりっ！」

そう言っただけで笑うのはさんに、つられて笑顔になるアリサさんにすずさん。

つい僕も笑っちゃったんだけど・・・

「「「・・・」」」

黙り込んでしまいました。

「ど、どうしたの？ 僕、何か変なこと・・・」

「い、いや、そうじゃなくて」

「遙、本当に男？」

失礼な。

「可愛くてびっくりしちゃって、つい・・・」

うう、昔からよく言われているけど、やっぱり複雑な気分だなあ。
でも。

「ふふっ」

「にやわっ！？どうしたの？」

「いや、こんなに楽しいの久し振りだなって思っ
て」

思わず吹き出しちゃったけど。

そう、同じ年の人と他愛のない話をしたのもこんなに笑ったのも
久しぶりで。

なんだか、心が満たされるような気がした。

- - - - - 3人とも複雑そうな表情だったのは気にしな
いことにした。

出会い（後書き）

こんな文に1時間半、だど・・・？

やはり駄文です。

全然お話進んでませんね。

ちなみに、時系列はユーノくんを動物病院に預けた日の翌日です。多少ずれている所は二次創作つてことで（こら

主人公はあまり戦えない予定ではあるんですが、（魔力はあるでも平均からみたらかなり高水準になるんだと思います。

はじめて姫宮くんが男の娘な表現が入りましたが、完全に私の趣味です。

まあ、あまり暴走しない程度に頑張ります。

何故か後書きはすらすら進むことに疑問を覚えつつ。

お読みいただいてありがとうございます、お疲れさまでした。

オリジナルキャラクター設定（ネタバレ注意、です。）（前書き）

まだまだ序盤なのですが必要なあとおもったので（既にキャラがぶれてるのd（まてやこら

書いてみます。

ネタバレについては問題ない程度に。

オリジナルキャラクター設定（ネタバレ注意、です。）

姫宮 遙 ひめみや はるか

9 歳 男（勘違い率はとても高い）

9 歳の中ではとても低い身長と体重で、髪は色素が薄めの茶髪を腰くらいまで伸ばしている。

本人はただ伸ばしているだけなのだが、それが女の子っぽく見えるのに拍車をかけている。

顔も体格相応に童顔で、小学校の制服さえ着ていなければ小学1年生の女の子くらいに見える。

性格は基本的に無関心で静か。本当はとても素直で、物事を断れなくて、どんなに辛くても恥ずかしくてもやろうとする。

表情もあまり変わらないが、それは昔からの癖のようなもので、面白く思えば笑うし、嫌だと思えば嫌がる。そう思わないことの方が多いのではあるが。

話し方は基本的には敬語だが、信頼出来ると思ったらある程度は碎ける。

学校の成績はなんでも高水準。

幼い頃から両親は共働きで帰ってこない日もある。

だから自分はいいこにしてようと大人しく静かになったのだが、いつのまにか、友人や両親の温かさや、甘える事を忘れてしまったようだ。

両親が家にいない時は基本的に家事はすべて自分でやるため、家事は得意で、料理も至らない所もあるがそこそこ。

クラスはなのは達と同じクラスだが、基本的にはひとり。

なのは達と友達になってからは一緒に行動するが、「仲良し4人娘」と影ながら呼ばれるようになる。

魔法での戦い方は、主にユーノから習ったりした拘束系の魔法を用いるが、射撃魔法も使えるし、魔力スフィアの生成も出来る。

魔力量なのはやフェイトに及ばないものの、一般的には高い方に入る。

拘束系や補助系の魔法と魔力の運用についてはユーノから驚かれるレベルのものがあ、鞭型のストレージデバイス・シールウィップと共に、相手を拘束する戦い方をする。

オリジナルキャラクター設定（ネタバレ注意、です。）（後書き）

ぬおお、眠いぞおお・・・！（午前4時

眠いので誤字脱字が心配ですが、とりあえず主人公の設定です。

では、読んでいただきありがとうございました、お疲れさまでした。

8月2日、魔法での戦い方について追加しました。

非日常とこんにちわ（前書き）

さて、今回から魔法とこんにちわなことになります。
ご都合主義が入ります。力量不足でして・・・。

では、どうぞ。

非日常とこんにちわ

放課後。

あの後、3人と自己紹介や軽い身の上話などをした。
午後の授業の休み時間にも話をしてみたりもした。

――――ここまで学校で誰かと話したのは初めてかもしれない。

でも、すごく、楽しい、嬉しい。

そう話したら、3人は嬉しそうにしてくれた。

じゃあ明日も、明後日も、いっぱい話そう、ってなのはさんが言うてくれた。

昨日までとはきつと違う日々。

でも嫌だとは思わない。

学校が楽しいと思ったことはなかったけれど、少なくとも、今、とても楽しい。

そんなことを考えながら僕はなのはさんと家に帰っていた。

「それにしてもアンタってどうして今までひとりでいたわけ？」

「ひとり、寂しくないの？」

アリサさんとすずかさんからの問い。

「あまり寂しいとは思ってなかったよ。ひとりでいいやって、そう思ってたから。」

今はそうは思わないんだけどね。と付け足すと、3人は満足そうに笑ってくれた。

「じゃあ、僕はこっちだから、じゃあね・・・ええと。また明日、なのかな？」

慣れないことに言葉が詰まる。

「うん！」

「また明日ねー」

「うん、また明日」

3人と別れ、僕は別の方向から家まで歩く。
なんだか長いと思っていて帰り道も、3人と話していたらあまり長く感じなかった。

家の玄関。

鞆から鍵を取り出す。

ガチャツ。

「ただいまー。」

「お、お帰り、遥。」

「今日は遅かったのね？」

お父さんとお母さん。

今日は帰っていたんだ。

「今日はもうお仕事はないの？」

「遥が学校にいつてすぐくらいに帰ってきたんだけど、今日は夜にまたお仕事かな。」

「そつえば遥、今日は随分とうれしそうなのね？」

流石にお見通しだったらしい。

今日あったことを話すと2人とも驚いたけど嬉しそうに笑い、

「そうかそうか、よかった。」

「不安だったのよ、ずっとお友達作れないんじゃないかって。」

「そうそう、おやつあるわよ？早く着替えていらっしやい。」

「はいっ」

そうして僕は部屋に行く。

……なのは達と話してから、なんだかお父さんとお母さんと話すのも楽しくなった気がした。

お父さん side

時は移って夜。

それにしても、あの遙に友達か。

ずっと面倒見られなくて、塞ぎこんじゃってたみたいだったけど、とりあえず一安心かなあ。

今はリビングで妻と二人でテレビを見ている。

ずっとミッドのテレビを見ていたから、なんだか久し振りに見る地球のテレビ番組は新鮮に感じる。

夜になったらまた2人でミッドに戻らなくてはならない。

遥には悪いけど、仕事なんだ。
僕らは平和を守るために頑張らなくてはいけない。

今日は、息子のため、と上司からの計らいで少しだけ家にいられたけれど、また長くなりそうだが。

そんなことを考えていたら、妻が

「そういえば、気がついてた？ 遥の潜在魔力、結構高いのよ？」

「ああ、気がついてるさ。で、それがどうしたんだ？」

「うふふ、実はね」

そう言つて1本の刀身のない剣のようなものをつてうおお！？

「それはストレージデバイスじゃないか！？ どうして？」

「どの世界でも魔法での事件は起きるのよ？ だからもしものために。次の仕事が終わったら、しばらくお休みになる。だから、その時に渡そうかな、って思っただけど、せっかくだから今のうちに渡して置こうかって。」

「あの子にも、同じ道を歩ませることになるのかな・・・。」

「それはあの子が決めることよ？」

そんなとき、2人の持っている端末に通信が入った。

「・・・もう、時間がないようだな。」

「そうね。私は、遥にまた出かけて来るって伝えてくるから、先行つてて。」

そうして、僕は、家を出た。

遥 side

お母さんが部屋にきた。

また、ふたりともお仕事に出かけるとのこと。
今度は帰るのに遅れるそうだ。

すこし寂しい、かな。

「あと、これ。」

「これは？」

「お守り代わりに持ってなさい。きつと力になるから。」

渡されたのは刀身のない剣のようなもの。変わったお守りだと思っ

「ありがとう、お母さん。」

「じゃ、言ってくるわね。いい子にしてるのよ。」

「うん！」

そうしてお母さんは出て行った。

夜。

今日はなんだか不思議な夜だ。

幼い男の子の声のようなものが聞こえたり、なんだか不思議な感覚に襲われたり。

・・・誰かに危機が迫っているような。

夕ごはんを食べ終え、気になるので出かけてみることにする。

こんな夜に出かけるのはきつと「いい子」じゃないのかもしれない。でも、なんだか嫌な予感がする。

お母さんから貰ったお守りを片手に持って、僕は不思議な感覚のする方に走り出した。

「な・・・なんだあれ？」

とりあえず感覚を便りに走ってみたらなのはさんがいた。

・・・変な怪物のようなものと一緒に。

なのはさんはなんだが変わった服装をして、杖のようなものを持って怪物に立ち向かっている。

しかしなんだかきこちなくて、なんだか怖くて、僕は走り出した。

「・・・え？」

おかしい。

怪物に近づいたらなんだかお守りが光ってしなる鞭が現れた。

これ、鞭だったんだ。

力を入れてみると、水色に発光する。

・・・これなら、怪物と戦える。

対等に戦えなくても、なのはさんの手助けになるんだ！

なのはside

私は初めての魔法でユーノくんを助けるために戦っていたのですが、怪物は思っていた以上に強くて、私は吹き飛ばされてしまいました。

「あうっ！」

迫る怪物。・・・私、死んじゃうのかな？

「なのはさんッ！」

「・・・え？」

聞こえたのは新しいお友達になれた、冷たくも、やさしい声。
遥くんの声。

ビシィッ！

声の聞こえた方向には、黒い服・・・きつと私と同じく、バリアジ
ヤケットをその身に纏った遥くんがいたのでした。

遥side

よかった、間に合ったようだ。

鞭を怪物に向けて振り、発光した、どうやら伸縮性のある鞭は怪物に命中し、動きを止めることが出来た。

「今だなのは、封印をつ！」

「う、うんっ！」

聞こえたのはさつき臙げに聞こえた少年の声。
そうか、このフェレットが……。

その後。

無事、封印とやらが済んだ宝石がなのはさんの杖に吸い込まれていった後、一度現場から離れ、近くの公園についた後、お互い情報交換をした……と言っても、なのはさんとフェレット……名前はユーノくんから、事情と、不思議な力について聞いた。

曰く、魔法は実在するそうだが、この世界、地球には魔力保持者は少ない。

曰く、僕となのはさんは高い魔力の素質を有している。

曰く、僕の鞭が突然出てきたのはデバイス……お守りが高い魔力反応を観測した時に自動でセットアップされるように設定されていたから、とのこと。突然服装が変わっていて驚いたのは封印が済んだ後だったが、それはバリアジャケットと呼ばれる防護服のようなものらしい。

曰く、この世界に散らばってしまったロストログアと呼ばれる過去の危険な魔力を持つ遺産、「ジュエルシード」を集めるためにユー

ノくんは来たらしい。　この後、なのはの家に厄介になるそうだ。

「説明は以上かな。　それにしても驚きました。　魔力を持つ人が2人もいたなんて・・・」

「あんまり実感はないんだけどね・・・」

「にはは・・・」

「それで、僕は、そのジュエルシード集めを手伝えればいいのですか？」

「！？　いいんですか？」

「あ、じゃあ私もっ！」

「困ってるんならほうっておけないですよ。　それに、お手伝いくらいならできるかなって。」

「私も嫌だっ！　がんばって集めよう？」

「なのはさん、遥さん・・・」

「なのは、でいいよ？」

「あ、じゃあ僕も遥で。」

「あ、うん。　改めてよろしく、なのは、遥。」

こうして僕は今までとは違う、非日常の世界に足を踏み入れた。

非日常とこんにちわ（後書き）

お疲れ様でした。

色々とうろ覚えでぼろぼろ&ご都合的展開でさりげなく泣きそうです。

でも限界。

さて、主人公のデバイスですが、グフのアレを想像していただければいいかなあと。

後方から戦うので、折角なのでこんなデバイスに。

別にバインドでいいじゃんって思った人、前にでr・・・わわ、ごめんなさい、お願いします、石はやめてくださいっ!?

さて。

こんなところで書くのもアレですが、当小説ではクロスしていただける小説の執筆者さんを募集しています。

「特別編」扱いとして、他の作者さんのオリキャラさんと遊んでみたいな、とか遊ばれてみたいな、とか。

主な理由は、私のいろいろなキャラクターの描写練習だったり、ただ単に楽しみたいだけだったり。（まてや

募集文は後であらすじにも書くつもりですが、もし大丈夫だよ、という方がおられましたら、感想にでも一報いただけたらな、とか。

以上、よろしく願います。

駄文を読んでいただき、ありがとうございました、お疲れ様でした。

優くんと愛の逃避行（タイトルと中身はきつと異なります）（前書き）

このお話は arishia 様から許可を頂いて書かせてもらったネタ回です。

優くんに關しましては、 arishia 様著「魔法少女リリカル…
…なんとか！」を読んでくださいっ。

とても面白いですよ！

あくまでこの回はネタです。

時系列をはじめ、登場人物など基本的には深く考えないでください。
（ちょ

てい
ギャグ回にするなら一緒に出すしかないなって思っただんです（ま

ちなみに、戦闘描写の練習、という個人的な課題も入ってます。

・・・簡略化されるんだとは思いますが（目逸らし

どうでもいいですが、モニタに向かいながらかつてなく緊張しています（w

では、どうぞ！

優くと愛の逃避行（タイトルと中身はきつと異なります）

さて、どうしてこうなった。

ここは、うちの僕の部屋。

目の前には息が切れてぐったりしている優くん。

すこし、さっきの事を振り返ってみよう。

> 数分前・朝<

さて、今日も朝の訓練と称して、魔法の練習をしていた。

数日前、初めて魔法（といっても魔力を帯びた鞭を振るっただけなのだが）を使った後、なんとなく思った。

もし人前で魔力反応をおこして勝手にセットアップしたら？

うん、それは非常にまずい。

母さんよ、非常事態に対応しやすいとはいえ何て事を。

そんなことがあつて、ユーノさんから基本を教えてもらって封時結界の練習をしている。

セットアップ 結界発動がスムーズに出来ればそうバレたりしないだろうと思ったからだ。

魔法文化のない世界は大変だと思う。

ちなみになのはさんとユーノさんは来ていない。

ほぼ一人暮らし状態になっていいるうちならともかく、今は朝早い。たとえ休日であっても、朝早くから小さな女の子が出かけるという

のも、ということ、あまり来ることは多くない。

ユーノさん1人で来てもいいのだが、フェレットが単独で行動するのはなんとなく目立つし、もし家族に見つかったら大変だ、とのことだ。

そんなことがあって訓練は1人で行っている。

まあ、教わりたければお昼過ぎにでもユーノくん教わろう、うん。

ユーノさん曰く、「遥にはそこそこの魔力と補助系魔法の適正があるみたい」だそう。

魔力量はなのはさんには遠く及ばないみたいだが。

封時結界の他に、ほかの魔法も教わったが、なんだかとても難しい。いくつか発動は出来るようになったが、とても残念なレベルである。

一方、なのはの方は順調に上手くなっている。

く、悔しくなんか・・・ないんだから・・・！

さておき。

今日の練習も終わり、家へ帰っているときに事件は起きた。

「待てーっ！」

「どこに逃げたって、匂いでわかるんだからっ！」

・・・なんだか物騒なことが聞こえたような気がしなくもないのだが、ひとり追いかけているようだ。

言い方から、強盗やらひったくりなのではないようだ。

匂いが分かるほど御厄介になってる犯人なんていないだろう、うん。

遠くから見えるのだが、どうやら追いかけているのは・・・あれ？優さん？

その優さんを数人の女の子達が追いかけている。

・・・遠くから見てもなんだかもの凄い速度のような気がする。あと、纏う雰囲気も恐ろしい気がする。

追いかけているほうも追いかけているほうも、魔力を保持しているようだ。

どうやらこの鞭は、人体などに保持されている魔力には反応してセツトアップ、なんてことはないようだ。

あくまで魔法を使った時などの放出された魔力に反応するようだ。

さて、優さんは必死に逃げているが、ここは助けなくちゃいけないだろう。

・・・あ、優さんが物陰に隠れた。・・・よし。

僕は隠れた優さんを探している人たちに近づいていく。

「あの、すみません、どうしたんですか？」

話しかけてみる。

気がついたようで、僕の方を向いて

「ええと・・・銀髪で青い目の女の子みたいな男の子見ませんでした？」

「可愛らしくて凛々しくてカッコよくて・・・はう」

「私のお嬢さんー!」

「違うもん、私のだもん!」

・・・なんなんだこの人たち。
2人目からなんだかおかしい気がする。

「・・・ええと。 あっちの方に行きましたよ?」

「え、本当!? ありがとう!」

「待っててね、優っ!」

再びもの凄い速度で示した方向に走っていく女の子たち。
・・・ええと、匂いで分るんだっただっけか。
すぐに移動しなくちゃ。
冷静さを欠いているように助かった。

「出てきて大丈夫ですよ、優さん?」

「うわっ!?・・・って、遥? あれ、みんなは?」

「とりあえずあっちに行つたよ。 すぐに離れないと。」

「うん。ありがとう、じゃあな！」

そう言って走って行くとする優さん。

でもどこか安全なところに行かないとすぐにさっきみたいな事になっちゃうよね？

「あ、いや、ただ逃げるだけじゃすぐにまたさっきみたいな事になっちゃうですよ？」

「確かにそうだけど・・・。」

「と、言うわけで僕んちでに来てください。今日は誰もいませんし。」

「助かるけど・・・大丈夫なの？」

「うん、大丈夫大丈夫、近いし、行こっ！」

そういつて優くんの手をとってすぐに走り出す。

幸い、走っている途中にあの子たちには見つからなかった・・・多分。

時々遠くからただものじゃない気配が感じ取られたが気のせいだと信じた。

回想終了

「とりあえず、見つからなくてよかったな・・・」

「そ、そうですね・・・。」

2人してぐったり。

「ええと、それでさっきの人たちは誰だったんですか？」

「ええと・・・その・・・友達・・・かな？」

「自信ないのですか」

「あつちからしたらそれ以上だと思われるのかも知れないが・・・」

「あはは・・・」

思わず苦笑してしまったが、おそらくそうだと思う。

・・・って。さっきは必死で走っていて考えていなかったが。

「次、僕姿見られたら攻撃されるのかな・・・？」

「あいつら魔法で攻撃できるのもいるけど・・・大丈夫だよ・・・多分」

2人で溜息をつく。

よくよく考えれば2人で手をつないで走っていたのだ。もし見られていたら大変だった。

「とりあえず、しばらくうちにいてください。あの人たちが諦めるまで」

「うん、サンキュー、遥。」

流石に異常レベルな索敵能力を持っているとしても僅か数分でこの家だ、なんて分かるようなことは・・・そんなことを考えていたら、家のインターホンが鳴った。

・・・ピンポン

「あ、ちょっと出てきますね。」

「おう。・・・一応それ持っとけ」

指で鞭のデバイス・・・うぐ、面倒くさい。今度名前付けよう。を示す優さん。

「さ、流石に数分で家に押し掛ける、なんてことはないと思います
が・・・」

「まあ、一応な。」

とりあえずデバイスを持って「はいっ！」と返事しながら家の扉
に向かう。

そして、扉を開けようとしたとき。

ビュイイイインッ！

「・・・え？」

おかしい。

セットアップが始まった。

扉の覗き穴から外を窺ってみると

おかしいな。各々のデバイスを構えてるさっきの女の子たちが。

「ええと・・・何故デバイスを構えていらっしやるんです？」

思わず扉は閉めたまま聞いてみたが。

「あなたが優を攫ってこの家に閉じ込めているのは分かっています

「！」

「監禁なんて、絶対に許さないんだからっ！」

「素直に開けないと・・・この扉・・・破壊します」

「んなっ！？ それは勘弁してください！」

愕然としていまい僕。

やばい。

相手は数人、こちらは1人。

実力差で覆せるような相手でもない。

・・・思わず、バリアジャケットを解除して優さんに異常を知らせるために部屋に向かって走り出す。

「・・・逃がさないっ！」

「うわああ、扉　ッ!？」

本当に扉を破壊されたっ!？

しかし、後悔している暇はない。
すぐに部屋に戻り、

「優さん、やばい、来ましたっ！」

「本当に来てたのかよっ!？」

窓を開く。

優さんと一緒に窓から屋根伝いに家から飛び降りる。

両親に屋根から飛び降りやすい家にしてくれたことに感謝しつつ。

「見つけたっ！逃がさない！」

しかし、追いかけてきていた女の子が飛行魔法を発動させながらこちらに魔力弾を放つ・・・って嘘でしょ！？

「なんで普通に魔法使ってるんですかつ！？」

「関係ないもん！優を返せっ！」

「遙、セトアップだ！マジでやばい！」

「・・・わ、分かった！」

慌ててセトアップし、飛行魔法を発動させた・・・んだけど。

「流石に、まだ慣れてないから・・・！」

速度も遅くフラフラだった僕を見かねたのか、優さんは

「遙、しっかりつかまっけていてくれよ！」

そう言って僕を所謂お姫様だっこで抱えて速度を上げて飛行する。

「！？　な、あ、あいつ・・・！」

「優にそんなことをさせるなんて・・・！」

あれ？

途端に溢れ出る黒いオーラ。

「あのさ優さん？　さっきより状態が悪化してませんか？」

「いや、つい・・・。」

とりあえず高速で飛来する攻撃を優さんに回避してもらいつつ時々魔力弾で反撃しながら（一発も当たらなかったが、というか当たる気がしなかった）逃げていたが、とうとう追い込まれてしまった。

「追い込まれたな・・・。」

「そうみたい、ですね・・・。」

優さんから降りて地上に着地する。

「あー、数秒くらいなら足止め出来ると思います。そのうちに逃げて下さい。」

「で、でもそれじゃ遙が・・・!」

「あはは、大丈夫ですよ。死にやしませんと思いますし。・・・短い間でしたが、今日は楽しかったです。」

どこにだよ、と優さんは苦笑しつつ。

「そうか・・・ありがとう、じゃなあな!優!」

「はい!・・・よし!」

たとえ数秒でも時間を稼いでみせる!

そう自分に言い聞かせてデバイスを構える。

「優がつ!」

「そこを通してっ!」

襲い掛かってくる女の子達。

「一度でいい！当たれえええ！」

魔力弾を放つ。

難なく回避。なら！

魔力を捌いている隙に接近、鞭での捕縛を狙う。

あくまで僕の基本戦闘スタイルは捕縛である。

「そんな攻撃！」

そうですね、余裕で回避ですよね。

そもそも、相手は多数だ。相手が多いと逆に誰を狙えばいいのか
混乱してしまう。

「反撃！」

相手からの反撃が来る。

多数の射撃魔法に・・・砲撃魔法！？

「そこは通してもらいます！」

「回避・・・うわあっ!？」

バインド・・・!

私的怨念とか入ってるんじゃないだろうか。

「優を勝手に奪おうとした罪、償ってもらったからっ！」

僕、男なんだけどなあ。そんなことを思いながら、迫る攻撃。・・・
数秒、稼げたかな？

着弾する魔力弾と砲撃。

そして、僕の意識は途切れた。

・・・時間にして、10秒。
良かった、2桁稼げたんだ。

優くと愛の逃避行（タイトルと中身はきつと異なります）（後書き）

さて、どうしてこうなった。

最初に思った言葉です。

戦闘描写なんてほとんどないじゃないk（ry
書き終わった直後に後悔しました、というかしてます。

今から全部書き直して優ラバーズさんなしで書き直そうかしら。
しかしギャグ回、戦闘描写入りの話を目指す、と最初に決めていた
ので、これで投稿っ！

まあ、ギャグはどこがそうなのかわからないような気がするし、戦
闘描写はお粗末ですけどねえ（目を大きく逸らす

・・・優さん、arishiaさん、本当にごめんなさい（土下座
（ちーん

遥「優さんに関しては逃げるだけでしたしねえ」（所々焼け焦げて
ボロボロに

そうだよねえ。

ちなみに、優ラバーズな方々ですが、まだ原作で会ってない・・・
というか、顔わかつちゃってもまずいのでこの小説では誰が誰だか
分らない感じになりました。

遥「あの人たち怖い・・・」

あははは・・・僕もarishiaさんの小説読んできたまに
そうおm（突然飛来した砲撃魔法に吹き飛ばされる

遥「作者ああああっ!？」

遥「と、いうわけで今回は以上です。 a r i s h i aさん、優さん、
本当にありがとうございます、そしてすみませんでした。 . . .
作者、大丈夫かなあ . . . ?」

もう1人の魔法少女（前書き）

さて、今回は少しお話が飛んでフェイト登場のあたりまで飛びます。
漸く男の娘らしいイベントを起こせそうです（ちょ

遥「起こさなくていいよ!？」

聞こえない聞こえない。

ちなみに、細かい展開を始め、ノエルさんの口調とかうる覚えにな
ってます。

違っていたらごめんなさい・・・!
では、どうぞー。

もう1人の魔法少女

優さんとそのお友達さんたちが来たあの日から数日。

僕となのはさんの魔法の腕も順調に上昇し、ジュエルシードも順調に封印していた。

「すずかさんの家に、ですか？」

「うん、そうだよ。今日の午後に。」

今は朝に魔法の自主的な練習をしてからなのはさんの家に遊びに行っていた。

高町家の若さや全員美形であることには驚いたが。

とりあえずお友達です、と言ったら歓迎してもらえた。

女の子だと思われていたのだが、男です、と言ったらすごく驚かれた。

なのはさんのお兄ちゃんの恭也さんには睨まれてしまったが、特に問題ない、と思われたのか、今は特に睨まれも警戒もされていない。

ジュエルシードの封印は、何度か経験したが、基本的に僕とユーノさんが動きを止めてなのはさんが攻撃、封印という形になった。

僕だって練習頑張ってるのに一向に差が縮まらない気がするのは何故だろう。

ちよっただけ悔しい。

さて、すずかさんの家が・・・

僕はまだ行ったことない。

恭也さんも来るらしい。

すずかさんのお姉ちゃんの月村忍さんと付き合っているらしい。

「じゃあ、今日は練習やジュエルシード探しはお休み・・・かな？」

「うん、そうだね。あ、ユーノくんも行くからね？」

「あ、うん、分かった。」

ユーノさんはあれから高町家のペット、ということになっている。
本人は不満そうではあるが露骨に嫌そうにはしていない。

「じゃあ僕は一度家に戻るね？流石にこの恰好で行くのは・・・」

「あはは・・・。」

そう、僕の今の格好は動きやすい、ということとで上下ジャージだったりする。

折角招いてもらっているのにこの恰好だと失礼な気がする。

「それじゃあ、また家でね？」

「うん、わかった！」

数十分後

「さて・・・準備はこれで大丈夫・・・かな。」

一度家に帰った僕は着替えた後、あちらで戦闘があってもいいようにシルウィップ（この鞭に付けた名前だ）を入れた鞆に色々入れて準備した。

「さて、そろそろ時間かなあ。」

時計を見てみたらそろそろ高町家に行く頃合いだった。

今日はジュエルシードは見つからないといいなあ。

不謹慎だがそんなことを思いつつ、一度バスに乗るためなのはさん達に合流するために僕は高町家に向かうのだった。

・・・で無事僕らは月村家にたどり着いたのですが。

「凄く・・・大きいです」

「にやはは・・・私も最初は驚いたよ」

そう。もの凄く大きい。

育ちがいいなとは思っていたが、流石に想定外だった。

インターホンを押すと、「少しお待ちください」と声が聞こえ、すぐに扉が開いた。

中にいたのは・・・ええと。

「なのは様ですね。　　すずかお嬢様から話は聞いております・・・
そちらの方は？」

「ええと、姫宮遙、です。」

「ああ、あなたがでしたか。失礼しました。私はノエルと申します。月村家に仕える者です。以後お見知り置きを」

「はい、こちらこそよろしく願います。」

「では、奥ですずかお嬢様とアリサ様がお待ちです。どうぞ」

そういつて奥へと案内してくれるノエルさん。
メイドさんもいたのか・・・！

「あ、そういえば遙くんは猫とか大丈夫？」

「大丈夫だけど、どうして？」

「すずかちゃんちって、猫たくさん飼ってるから。苦手だと大変だからねえ」

にやははと苦笑するなのはさん。

猫は嫌いではない。苦手でもないのだが・・・

奥へとついた後、扉を開けてもらうと、すずかさんとアリサさんが手招きをしていたのでそちらへ向かったのだが・・・

にゃー！

「ひあああつ！？」

とびかかる猫さんズ。そして倒れる僕。

そう。何故だか分らないのだが、僕は動物に妙に懐かれる。
たまに異常じゃないかと思うほどに。

「あわわ、遙くんっ!？」

「ちょ、ちよっと、大丈夫っ!？」

「え、ええっ!？」

慌ててなのはさん、アリサさん、すずかさんが助けに来てくれたが、
なかなか猫は僕から離れようとしなない。

「ちょ、ちよっと、そんなに強くしがみつかないで・・・そ、そこ
は・・・らめ、はうあ、ああ、ああんっ・・・!」

・・・しばらくお待ちください・・・

「うう、ひどい目にあった・・・」

「にやはは、びっくりしちやったよ。」

「私もびっくりしちやったよ・・・」

「遙ってば、ずいぶん猫になつかれるのね?」

なんとか引き離してもらって今は椅子に座っているのだが、相変わ

らず膝の上やら肩の上やらには猫が乗っかっている。
なんだかとても幸せそうにしているのだが、何故なのか僕には分らない。

引き離してもらったとき、色々と乱れていたらしく、3人が顔を赤くしていて、「・・・遥って本当に男の子？」とか言われたのは早急に忘れたい記憶だった。

「あはは、猫に限った話じゃないんだけどね・・・。少し前の話だけど、鳩がたくさんいる公園に足を踏み入れた時はいきなり数十羽の鳩が飛びかかって来て気がついたら公園の中央の噴水近くに押し倒されてて鳩が群がってて人だかりが出来てた」

すこし疲れた顔をして僕が言う。

忘れたい記憶その2である。

鳩の集団の妙に高い集団能力には驚いた。

気がついてたら鳩が協力して公園の中央まで運ばれたし。

あの時集まっっていて一部は写真撮影をしていた少し息の荒いお兄さんお姉さん達は少し怖かった。

「そ、それは・・・」

そして再び顔を赤くして顔を逸らしてしまう3人。・・・あれ？

そんなこんなで楽しく話をしていたのだが。

ちなみにユーノさんはすずかさんの膝にいたりアリサさんの膝で遊ばれたりしていた。

ユーノさんも大変だ。

突然、ジュエルシードの反応を感じた。

（ジュエルシード！？）

（こんな時に！）

（僕が先に行く！なのはと遥は後から追いかけて！）

念話で話してからユーノくんが突然飛び出し、僕となのはさんがそれを追いかける。

「ちょ、ちよつと！なのは、遥！」

「ちよつとユーノさん追いかけてくる！」

「だ、だったらなのはちゃん1人でも大丈夫じゃあ？」

「なんだか不安なんだもん！転びそうだし！」

「「・・・ああ」「」

「ど、どうして2人とも納得するのかな！？遥くんも余計なこと言わないでよ！」

少し涙目になってしまっていたなのはさんと一緒にユーノさんを追いかける。

・・・嘘を言ったつもりはないんだけどなあ。

そんなこんなで反応のあった地点までたどりついたのだけけど。

「大きな・・・猫？」

「そ、そうだね・・・」

「ジュエルシードの暴走した魔力の影響、だね」

あんな大きな猫に飛びかかれたら・・・はうう／＼／
じゃなくて。

「今回はユーノさんが封時結界お願いします！」

セットアップしつつユーノさんに言う。

結界魔法は勿論ユーノさんの方が上なので、ユーノさんが先に来た時はユーノさんをお願いしている。

「うん、わかった！」

「レイジングハート、セットアップ！」

<オーケー、マイマスター。セットアップ>

レイジングハートさん（人格があるので僕はさん付けで呼んでいる）から光が溢れ、なのはさんがバリアジャケットを身に纏い、杖となつたレイジングハートさんを持ち、猫の方に飛んで行くのだが・・・

その時、金色の魔力が巨大化した猫に襲いかかった。

にやあぁっ！？

猫からジュエルシールドが飛び出し、猫は元の大きさに戻って行き、驚いて逃げていった。

魔力弾を放ったのは金色の少女。

そのままジュエルシールドの確保に向かったが、それをなのはさんが阻止する。

予想外の出来事だったが、僕も魔力スフィアを形成しつつ増援を警戒しながら金の少女にゆっくり接近する。

こちらは対人戦は皆無だが、2人いれば行ける・・・か？

予想通り、高速で迫る魔力反応。

魔力反応に向けて魔力スフィアを発射しつつ、プロテクションを発動する。

高速で迫る・・・狼（狼と目視出来た）は、難なく魔力スフィアをかわし、直接攻撃でシールドに攻撃した。

「ん、アンタ、随分と冷静じゃないか」

「そうでもないですよ。今緊張と恐怖でガタガタです」

「ふん、アンタたちにフェイトの邪魔はさせないよ！」

「う・・・ぐ・・・！」

しかし、僕の脆いシールドでは限界があったのか、大きくヒビが入るが漸くそこで攻撃は止まる。

1人では、時間稼ぎも無理か・・・？

しかし、やらなくてはならない！

僕は自分を言い聞かせ、シールウィップで攻撃を仕掛ける。

「たあぁっ！」

「そんな攻撃っ！」

しかし、その攻撃はヒョイヒョイとかわされてしまう。

「そんな攻撃しかできないなら、今度はこっちから行くよ！」

大振りに右前足を振りかぶる。

よし、ここだっ！

前からユーノさんには魔法の高速展開と補助魔法に適正があると言われてきた。

「バインドっ！」

1部分のみだが、高速バインド展開ならそこその自信がある。

「何いつ！？」

右前足のみだが拘束できた。

「ぐうう、離せっ！」

少しだけだがなのはさんの方を見ると、金の少女に負けていた。

・・・あー、駄目だったか。

「終わつたみたい、ですね。」

そう言いつつバインドを解除する。

「なんだ、アタシの事を人質にでもすりやいいのに」

「そんな悪役じみた事をしたくないですよ。そりゃあなた達から見たら僕は悪役でしょうが」

「フン、アンタ面白い奴だね。名前は？」

「遥。姫宮遥です。」

「アタシはアルフ。フェイトの使い魔さ。」

使い魔・・・後でユーノさんに聞いてみよう。

「まあ、感謝はしないけどさ。それじゃあね」

そう言つてアルフさんはフェイトさんと一緒にどこかに飛び去ってしまった。

この先、ジュエルシードを封印するにはあの2人に競り勝たないといけないのか・・・。

なのはさんやユーノさんがいるから人数的には有利なんだけど、今回は負けてしまった。

「ああ、強くないといけないな・・・」

僕の眩きは誰に聞かれることも無く消えていった。

その後。

気絶したなのはさんは転んで頭をぶつけたことになり、僕が連れて帰った。

ちなみにユーノさんは僕の肩の上に乗っている。

今は、先程すずかさんのベッドに寝かされていたなのはさんの目が覚めたので、恭也さんと3人（4人？）で帰っているのだが。

場が・・・重い・・・！

（また、ジュエルシードを集めようとしたらあの子と戦わなくちゃいけないのかな・・・？）

（そう、なるね・・・）

なのはさんからの念話にも相槌でしか返せないが、実際そうなのだろう。

・・・今度は、強くなって、なのはさんを支えられるくらい強くなって・・・でも。

強くなって、勝った先に何があるのだろう。
あっちにも目的があるはずだ。それも、ロストロギアを必要とする程の。

でも、話しあうとしても、先ずは強くなないと、話すことすら、
叶わないのだろう。

まずは、強くなるう、話はそれから・・・

フエイトside

戦闘は無事に終わり、今は私の部屋にいる。
今回は戦えなかったけれど、私はあの黒いバリアジャケットを身に
纏った女の子のことはかり考えていた。

「どうだった？あの白いのは」

「え？ええと、魔力があるだけでそれ程でもなかったよ。そっちの
黒い茶髪の女の子は？」

「アイツはなかなかできるみたいだったよ。終始冷静だったし、一
度バインドで捕らえられちゃったしね」

「え？アルフが？」

意外だった。

魔力量は白い女の子より少ないはずだったのに・・・
私の中であの子の興味が強くなっていた。

「そっか。それじゃライバルだね」

「あの時は油断してたけど次は負けないさ。フェイトのためにもね」

「うん、ありがとう」

そうアルフが言ってくれたのが嬉しかった。

そっだ、私はジュエルシードを集めなくちゃいけないんだ。

・・・母さんのために。

もう1人の魔法少女（後書き）

さて、思ったより遥の活躍する回でした。

まず、あれです。 ユーノくん、ごめんなさいorz

今回は空気にならないように、頑張ります、はい。

今回は、前半は男の娘っぽく、後半はフラグを、というコンセプトではあったのですが、前半はただ微工口ただけで後半のフラグもあまり目立たないですね・・・

遥「じゃあ、なんであんなことさせたのさっ・・・」

やりたかったから

遥「・・・」（ぐすん

うわわ、泣かないでっ!?

さておき、フェイトさんは多分やんでれます（まてや（そういうフェイトさんが好きらしい）

では、今回は以上です。

読んでいただき、ありがとうございました、お疲れさまでした。

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・前編（前書き）

さて、このあたりから今まで以上にお話がおかしくなります（土日
に色々あった

というかフェイトがおかしくなります。フェイト好きな人は逃げて
えええ！

冒頭部分読んで大丈夫だった人はもしかしたら私の同志かも知れな
いです（ちょ

主人公が話毎に強くなっているのは仕様です。

もう少し詳しく言くと私の趣味です。ごめんなさい。

今回は前後編に分けようと思います。

到着、夜になるまでが前編の予定ではあります。

鯨島さんの口調は全然わからないので聞き流してください。

変なところがぼろぼろ出てきますのでorz

では、どうぞ！

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・前編

フエイトside

私は当面の相手となる3人の事を考えていた。

1人目に、あの白い子。

魔力量は驚異だけど、経験が足りないのか、今はさほど驚異ではない。

2人目・・・人かどうかはわからないけど。あのフェレットのようなネズミのような使い魔。

結界魔法が使えるみたい。

直接攻撃はしてくるか今のところはわからないけどこの子もそこまですでも。

最後、3人目。あの茶髪の黒い子。

アルフと名乗りあっていたようで、姫宮遥、と言つらしい。

魔力量は白い子に劣るようだけれど、魔法の行使も、動体視力や判断力も優れていた、ってアルフが言ってた。

しかしそれ以上に私の目を引いたのは・・・

あの長くて柔らかそうな茶髪に、この地域特有の黒くて大きな瞳、守りたくなる白い肌、そして、私よりも華奢で小さい体。

そう、何を言いたいかって言えば私はあの子に見惚れていた。

同性愛とかよく分らないけどお互いの了承を取ればきっと大丈夫だよ！

本当は、あの子と戦いたかった。
闘って魔力ダメージでノックダウン、そのままお持ち帰り・・・つ
てそれは誘拐だよね。危ない危ない。

でも、相手の戦力を奪う、ってことにはなと思うの。
今のところ一番の強敵となりうるのはあの子だから。
ある程度省略してそれをアルフに話したら、

「いいんじゃないか？あまり褒められたやり方ではないけれどフェ
イトがiiiって言うんだったら。」

と言ってくれた。いい使い魔を持てて私は幸せだ。

そう遠くないいつか、きつと私はまたあの子と戦うことになる。
その日こそ、私はあの子を・・・うふふ・・・。

遙side

ビクンッ！

ぶるぶると体が震える。どうしたんだろう。誰かが僕のことを噂し
ているのだろうか。でもそれ以上に感じる何かが・・・あまり深く
考えないようにしよう。

今日は、高町家、月村家、パニングス家の3家族合同で毎年恒例の温泉旅行に行くらしい。

僕も参加することになった。

なのはさん、すずかさん、アリサさんに誘われたので、別に断る理由もなかったのだ、と言う訳だ。

あれから、朝の訓練にはなのはさん、ユーノさんも参加するようになり、なのはさんはさらに成長している。

僕といえば、拘束魔法や飛行魔法、射撃魔法も練習している。

しかし射撃魔法をはじめ、攻撃系の魔法にあまり適性はないらしく、なのはさんには遠く及ばない。

ただ、ユーノさんが言うには拘束系統の魔法には常人以上の成長を見せている、だそうだ。

そのうち拘束魔法で必殺技めいた何かが欲しいかもしれない。なのはさんが使えるようになった砲撃魔法、デイバインバスターのように。

訓練の話は置いておこう。今日はお休みの日だ。

今は車に乗って、海鳴温泉、という温泉宿に向かっている。

車を数台用意していたようで、この車には、僕、なのはさん、アリサさん、すずかさんが乗っている。

運転手はパニングス家の使用人の鯨島さんだ。

余談だが、最初集まったときに

「おはよう遙くん！今日も可愛いね！」とか

「遙は男の子でしょ？・・・まあ、可愛いけど・・・」とか
「あはは・・・凄く可愛いよ・・・？」

など言われた時は流石に悲しくなった。

何故かクローゼットに女の子用のような服しか入れてくれない母さんをちよつとだけ恨んだりもした。

流石にスカートが入っていた時は母さんは僕の性別を分かっているのか不安に思えた。穿いていけないけれど。

その後に慰めてくれたユーノさんがいつも以上にとても暖かい人にも思えた。

3人は車の中でもとても元気に話していたが、僕はというと、前日まで結構夜中まで魔法の練習やら何やらしていたので、凄く眠い。

僕は席の一番隅のほうで陣取っていたので、発車してすぐに寝ることにした。・・・ふああ、お休みなさい・・・

なのはside

私たちはアリサちゃんやすずかちゃんとお話をしていたのですが、

「・・・くー・・・すー・・・zzz」

お疲れなのか遙くんが寝ちゃっていました。

せつかく4人一緒なのに、って思っちゃったりもしていましたが、私には

「遙くんの寝顔、可愛い・・・」

こっちの方が重要なのですた。

「わああ、すっごく可愛い・・・」

「本当に可愛いわね・・・本当に男なのかしら？」

うつとりするすずかちゃんになんだか疑いの目を向けているアリサちゃん。

そして、アリサちゃんは何か思いついたのか、

「・・・脱がせてみる？」

そう言ったのですた・・・って、ええええっ!?

「そ、それは流石にまずいよアリサちゃんっ!？」

「そ、そうだよっ!遙くんがかわいそうだよ!」

思わず反対した私とすずかちゃん。確かに気になるけど・・・。

「なりませんぞ、すずかお嬢様」

そんな時、鮫島さんに注意されてしまいました。

「そんなことをしてしまいましたは、すずか様の仰る通り、かわいそうだと思いますぞ。そういった事は、お互いの了承を得てから・・・」

真顔で注意する鮫島さんに、「わ、分かったわよ、やめればいいんでしょ?」とちよつと不満げなアリサちゃん。

・・・でも、お互いの了承を得てから服を脱がすって・・・は
う／／／

「どうしたのなのは？顔赤いよ？」

「熱でもあるんじゃないかな？」

「い、いや、大丈夫だよ！うん、元氣元氣！」

「な、ならいいんだけど・・・」

「う、うん・・・」

なんとかごまかせましたが、すっごく焦っちゃいました。

結局、また3人でお話したり、遙くんの寝顔を携帯電話で撮ったり
して、楽しい車の中での時間が過ぎていったのでした。

遙side

久しぶりに気持ち寝ることが出来たのだが、どうやら到着したらし
い。

なのはさん達に起こされたので、起きたらなんだかみんな満足そう
な顔をしていた。

一体何をしていたんだろう。

アリスさんが小声で宿での遙の寝起きがどうとか言っていたが、本

能が気にしてはいけなないと悟ったのか、よく聞こえなかった。

さて、宿に到着し、荷物を置いた後、最初に何するかと思っていたところ、みんなで温泉に行くそうだったので、僕もついて行くことにした。

そして。

（は、遥、助けてっ！）

（そんなこと言われても・・・頑張っではみるよ）

僕は何故か女湯に入れられそうになったがなんとか断れた。しかし、人ではないユーノさんはどうか。

声から僕は男の子だと思っていたが、なのはと、声の聞いていない2人はそうは思っていなかったようで、一緒に入ろうとかユーノさんに言っている。

人ではないとは言え、流石に心細いだろうなあと思ったので僕は必死に3人に頼み込んでいるのだが、やはり人数的にも分が悪い。

仕方がないので最後の手段を取ってみることにした。

「じゃあ1つ何か言うこと聞くからさ？」

どうせ僕だし最後の手段とは言ってもあまり意味は・・・とは思ってたが、その瞬間、確かに3人の時間は止まった。

本当っ！？ともの凄いい剣幕で迫ってくる3人に、僕はジュエルシード暴走の時やアルフさんが襲いかかってきたとき以上の恐怖を感じた。

「じゃ、じゃあさ、裸になって！」

アリサさんがそう言っただけで女湯の方に引張って行く。……ってそれはマズいからっ！？

「だ、駄目だよアリサちゃん！……流石に、恥ずかしいよ……」

「別に、お互いの了承を得ればいいんでしょう？だから……」

何の話なのだろう。

結局、アリサさんが折れて今夜アリサさんに渡された服を着て一緒に寝る、という事になった。

余分に持ってきていたのかと聞いたら本当は夜にやろうと思っていたゲームの罰ゲーム用の服、らしい。

あまり恥ずかしくない服がいいな……。

交換条件が成立したので、今僕とユーノさんは一緒に男湯に入っている。

助かったよ遙、と涙ながらに（表情はよく分らなかったけど声がそんな感じだった）言われた時は、この後待ち受けることなどどうでもよく思えた。

人助けは気持ちがいい物のようだ。

お風呂には裸で入ったのだが、何故か他の入浴客に目を逸らされてしまい、どうしてだろうとユーノさんに念話で聞いてみたらあはは、遙は可愛いからね、と言われた。

・・・むー。

お風呂から上がると、鮫島さんに「お嬢様からの言いつけです。これを着てお待ちください」

と服を渡された。これが罰ゲーム用に用意していたという服だろうか？

脱衣室に戻って、片隅で着替えていると、（周りからの不穏な視線は気にしないことにした。なんだか怖い）どうやらこれは女の子のであろうアニメキャラクターの服だった。

いかにも「魔法少女です！」っていう水色の衣装だった。

確か朝にやっているアニメキャラクターの服装だったと思う。

膝上くらいまでの靴下に信じられないくらいに短いミニスカートに、スパッツ、所どころに可愛い装飾について、胸元に大きなリボンのついているシャツのようなものに、多分これで髪を結え、ということなのか、長めのリボンが2本ある。

あとは、どことなくポップな鞭（だと思う）があった。

魔法少女の服だったり鞭だったり、なんだか仕組まれてるんじゃないかかと思っただが、それは無いだろうとその考えを振り払いつつ、着替えを進めた。

・・・その入浴のために来たのだろうお兄さん、息を荒くしないで必死にカメラをのぞきこまないでください。なんだか怖いです。

着替え終わり、（あまり戸惑うことなく着替えられたのは母さんのおかげではあるが何故かあまり嬉しくない）脱衣室から出ると、なのはさんたちが既に外で待っていて、

「わー、本当に着たんだっ!？」

「うん、やっぱり似合うわね!」

「なんだか・・・羨ましいな・・・」

なのはさん、アリサさん、すずかさんが驚いていたり嬉しがっていたりなんだか羨ましそうにしていたいしていた。

一緒に寝るまで、ということはこれを朝まで、ということかなんだか不安になった僕だった。

結局あの服のまま3人に囲まれながら部屋に戻っていた。

・・・うー、長い靴下穿いているとはいえずーすーする・・・!

一刻も早く部屋に戻って籠りたい気分だったが、急に声をかけられた。

「おい、そこ2人待ちな」

声をかけたのはなんだか背の大きいお姉さん。

しかし、この感覚・・・どこかで・・・

（やあ、遙。アタシだよ、アルフだよ）

ああ、アルフさんか。

（で、アルフさん、どうしたんです？こんなところで。）

（その白いのにも言っておくよ。このままジュエルシードを集めるなら・・・2人ともガブツといくよ）

（そ、それって・・・）

（じゃあね、アタシが言いたいのとはそれだけさ。それと遥。アンタはフェイトが随分と気に入ってるみたいだよ。近いうちに一緒になれるかも知れないね？）

「おっと、他人のそら似だったみたいだ。すまないね、それじゃ」

そう言っただけでアルフさんは去って行った。

・・・気に入ってるって・・・僕、話したことないはずなんだけど・・・。

なのはさんは少し落ち込んだ表情を、すずかさんは困惑した表情を、そしていきなり話かけてそら似だと言われて立ち去られたアルフさんに腹を立てたのか、起こっているようだった。

アルフさんの姿が見えなくなっただけから、念話が飛んできた。

（ところで・・・その服はどうしたんだい？そういう服が好みなのかい？）

慌てて否定したのは言うまでもなく。

そして夜。

その後の夕食等もあの服ままだった。

恥ずかしくて少し泣いてしまっていたのだが、それが余計可愛く思えた、とかみんなは言っていた。

・・・なんでさ。

部屋に布団を敷いて、（元々この部屋はなのはさん達3人の部屋だったのだが、アリサさんが事情を説明したら女将さんはすぐに4人分の布団を敷いてくれた。融通の利くいい女将さんだとは思うが今は利かなくていいところでしたよ女将さん。）僕らはすぐに寝ることになった。

電気を消して、各々の布団に入って寝る・・・のだが、

「えへへ」

一番最初に寝ていたと思ったすずかさんが、みんなが寝たと思ったくらいに布団の中に入ってきていた。

意外と大胆な人なんですね・・・って違う違う。

「ちょ、ちよつと、すずかさんっ!？」

2人を起こしちゃまずいので小声で。

抵抗するためにもがいてみるが全然びくともしない。

「遙くんは私の抱き枕なんだよ」

「そ、そうですか・・・」

抵抗を諦めた僕に嬉しそうにうんうんと頷くすずかさん。
将来怖い奥さんになりそうだ。

「・・・今、何考えてたの？」

突然ハイライトの消えた目の笑っていない笑顔でのぞきこまれる。

「な、なんでもないよっ！？う、うん」

我ながら男らしくないと思ってしまったが仕方ないと思う。怖いもん。

しばらくして、すずかさんが気持ちよさそうに寝たところで、僕も寝ようかと思った時。

「・・・ジュエルシード？」

ジュエルシードの反応を感じた。

慌てて寝て力が弱まっていたすずかさんから抜け出し、荷物からシルウィップを取り出していた時、なのはさんも気がついたのか目をこすって起き上がっていた。

あの様子だと出るまですこしかかりそうだ。

念話でなのはさんとユーノさんに話しかける。

（なのはさん、先行ってます！ユーノさんはなのはさんの事待っててください）

（ふあああ、うん、気をつけて）

（了解！・・・大丈夫、なのは？）

念話にまであくびが入るなのはさんに苦笑しつつ、僕は宿から飛び出し、セツトアップをして、魔力反応のある所まで飛行魔法で飛んで行った。

そこにいたのは・・・

「あ、1人で来てくれたんだ。手間が省けたかな、嬉しいなあ」

嬉しそうに、でもどこか寒気を感じる笑みを浮かべていたフェイトさんと、

「ジュエルシードも大切なんだけどねえ。アンタに恨みはないんだけど、悪いね」

そう言つて突然僕に向かってトラップ式だと思われるバインドを発動させたアルフさんがいた。

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・前編（後書き）

なんだか予定が狂いました。

後編は短くなりそうです（？）

原作うる覚えにつき、どことなくなんかおかしいですね。ごめんなさい。

今回は明日投稿できたらいいなあと思っております。

・・・フェイトの性格はあんな感じです（実はああいうのが好み）目を逸らす

では、駄文を読んいただきありがとうございました、お疲れ様でした。

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・後編（前書き）

漸く更新出来ます・・・！

携帯での更新が怖くてずっと更新出来てなくて申し訳ないです、はい。

今回はたぶん短くなります・・・！

では、どうぞ！

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・後編

なのは side

嫌な予感がするの。

先に行っただけの遙くんの魔力が感じられず、念話も通じないの。もしかしたらまだ闘ってないだけなのかもだけど・・・それでも、なんだか嫌な予感がするの。

急いで飛んで反応のあった場所まで向かう。
お願い、無事でいて・・・！

「・・・見えた！・・・なのはっ！？」

私の肩で一緒に飛んでいたユーノくんの悲鳴なの。
その声には私は前方を見たの。

「遙・・・くん？」

そこには。

暴走の処理の済んだジュエルシードと、金の女の子とあの時の温泉のお姉さんと・・・

金の女の子の腕の中でぐったりと意識の途切れていた遙くんがいたの。

フエイト side

「どうして・・・遙くんを？」

白い子からの問いかけ。

そんなことは・・・決まっている。

「愛の力でs「人質さ。人数の少ない状況では有利になるってことくらいは分かるだろう？」」

アルフに重ねられてしまった。・・・むー。

「ひ、人質っ！？遙くんは渡さないのっ！」

そういつてあちらはデバイスを構える。

こちらもデバイスを構える。

悪いけど、こちらも負けるわけにはいかない。

「賭けよう、ジュエルシードひとつっ！」

「・・・行きます」

腕の中の遙のいい匂いにくらくらするけれど、なんだか今は頑張れそうな気がする。

無邪気な表情で寝ている遙を見ると、何故か力が湧いてきたの

だった。

アルフside

危なかったね。

あんな所で愛の力だのなんだの言う訳にはいかなかったのさ、だから許しておくれ、フェイト。そんなに怖い視線で見つめないでくれ。

どうやらあちらは戦闘が始まったみたいだ。それで、こちらにはあの使い魔が来る。

「使い魔同士で戦え、ってことか」

「使い魔ではないんですけれどね。・・・それよりも、何故、ジューエルシードを？あれは危険な物なんだ！」

「ご主人様・・・と言うよりはその鬼婆の意思だけれどね。こちらにも負けるわけにはいかない理由があるってことさ！」

そのやりとりからこちらでも戦闘が始まった。

アイツはどうやら直接戦う能力はないようだ。

・・・バインドのセンスもアイツより劣るが、どうやら場数は踏んでるみたいだね。

きこちなさは感じない。

「その程度のバインドでっ！」

奴に殴りかかる。

シールドを展開させて来たが、それを打ちぬく！

しかし奴は持ちこたえたようだ。意外とやるね。

そしてしばらくお互いの隙を突くような戦闘が続く。

「これで・・・落ちろっ！」

「うわあああっ！」

シールドを抜いて吹き飛ばす。

フェイトの方も戦闘が終わったみたいだし・・・

フェイトのバルディッシュがジュエルシールド、どうやら2つを確保したあと、あの白いのに話しかけられていた。

「・・・教えて、あなたの名前は・・・？」

「・・・フェイト。」

「フェイトちゃん、どうしてこんな事をするの？ 私たちは民間協力者。ユーノくんのお手伝いでジュエルシールドを集めてる。・・・事情を話してくれれば協力できるかもしれない！」

「私・・・は・・・」

駄目だ、こんな所でフェイトの戦う意味を曲げさせるわけには！

「言わなくていいよ！温かい所で育ったような奴らに、フェイトの気持ちは分らない！」

そう言った所で、フェイトから念話で帰る、と言われたので、帰るために魔法で飛び始める。

「・・・もう、諦めてください。次は、手加減出来ないかもしれな
い。遙も終わったらちゃんと返すつもりでいます」

そう言う割には少し顔がにやけちゃってるよフェイト。
あの白いのがなんだか変な表情してるじゃないか。

そして、アタシ達は飛び立った。

なのは side

「負けちゃった・・・ね。」

そう、負けちゃった。

あつちは遙くんを抱えていたのに。
いや、前より動きが早かった気がするけど気にしちゃいけない気がするの。

「負けた・・・ね。」

「私、甘ったれてたのかな？最初は、ユーノくんや遙くんと同じよ

うに、魔法が使えてうれしくて。その力でユーノくんやみんなを助けられるならって、そう思ってた・・・」

「なのは・・・」

「魔法で痛い思いをすることも、怖い思いもすることも考えてなかったの・・・」

「遙くんみたいに、戦う覚悟、出来ていなかったの・・・」

魔法を使えるようになってから、なのはを守りたい、と毎日魔法の練習をしていた遙くんを思い出す。

・・・今度は、私が守る番なの。

「でも、今は、違う！絶対に遙くんを助けて、それで、フェイトちゃんとお話するの！」

フェイトちゃんはなんだか遙くんの話をする時は顔が緩んでいたけれど。

お話さえ出来れば。きっと解決すると思うの。

でも、もう甘ったれない。

戦わずに話して事情を解決しよう、だなんて思わないの。

・・・全力全開で戦って、話を聞いてもらうの！

遙 side

僕、何をしていたんだっけ・・・？

あの後、何故か恍惚とした表情でフェイトさんに睡眠の魔法をかけられて・・・。

「・・・ここ、は？」

「あ、気がついたんだね・・・！」

そう言つて突然飛びかかってくる嬉しそうに笑うフェイトさん。

「ここは、私とアルフの部屋だよ。・・・そして、これから貴女も住むところ」

・・・貴方の発音が違ったような？・・・それより

「・・・僕も、住む？僕は・・・！」

そこで、部屋の中にアルフさんがやってきた。

「まあ、人質つてヤツだね。まあ、フェイトはアンタの事をただの人質だとは思っていないようだけれど」

「そ、それって、どういう・・・！」

「さあ、遙、目が覚めたことだし、一緒にお風呂入る？」

ベッドから僕を起こして、手を取って立たせてくれた。あ、僕フェイトさんより背低いんだ。

でも状況が理解できない・・・！

フェイトさんは女の子だよねっ!?

「な、なんで僕がフェイトさんとおっ!? 別々に入ればいいよねっ!」

「ふふ、別に躊躇うこともないよね?」

そう言っ僕の脇と膝裏に腕を入れて抱きかかえるフェイトさん。
マズイ、なんだかマズイ……っ。まさか。

「ええと……その……僕、男の子なんですけれど……。」

ぱち、ぱちぱち、ぱちり。

フェイトさんの瞬きの音が妙に大きく聞こえるくらいに部屋が静かになった。

そして……

「「ええーっ!?!」」

ふたりの悲鳴が部屋に響きわたった。
僕……そんなに女の子なのかな?

フェイト side

そんな……遥が男の子?
でも、言われた時、自然と嫌な感じはしなかった。
そっ、私は遥が好きなんだ。

男の子でも女の子でも。

ちょっと非健全なのが健全になったただけだね！

「そ、そうだったんだ・・・さて。」

「さて？」

「お風呂、入ろうか」

「・・・あ、あれ？え、ちょっとっ！？性別違っつて分りましたよね！？」

「フェイトはアンタの事が好きだって事さ。諦めな」

「え、ええっ！？」

私が遥の事綺麗してあげるから・・・
うふふ。

「わー、わーっ！？」

半ば狂乱状態でもかく遥。

ああ・・・涙目で・・・可愛いなあ。

・・・その後、女の子の嬉しそうな声や悲鳴などが聞こえ、我が主人とその思い人？の声ながら、アルフは顔を赤

くしたのだとか。

海鳴温泉と誘拐と決意（仮題）・後編（後書き）

最近急速に遙に感情が芽生えてますね。

どうも、こんにちわ、まーしゅです。

遅れた割にこんなのでごめんなさい。

たぶん1日1回更新はもう出来ませんorz

昨日ヤンデレな女の子の眠れない例のCDを聴きながら寝ていたら
こんなになりました。

ヤンデレっぽくはないけれど一途っぽくしたかったんだと思います。

・・・まあ、あれです。僕はこんな感じのフェイトが好きだったっ
て事でs（どこからか飛んで来た金色の砲撃魔法に吹き飛ばされる

遙「作者さんが飛んで行ってしまったので僕が言います。」

遙「お疲れ様でした、駄文を読んでいただいてありがとうございます
でした！」

囚われのお姫様。（前書き）

誰が何をしたのか、自宅のPCがサイトに繋がった・・・！
テンション高いまま、次話投稿です。

この回は妙に難産でした。
どこまで調子に乗れるか、というか本能のまま書けるか、
というか（？）

今回は原作のお話にはないオリジナルのお話（遥はこの後どうなる
かのお話）なので、短くなります。
前話も短くなると言ってたので、なんかアレですが・・・。

活動報告に詳しく書きましたが、マイペース様、クロスのお話は遅
れます、ごめんなさい・・・！

ちなみに、いつのまにか総合PVが10000を超えていました。
ありがとうございます！

では、どうぞ。

囚われのお姫様。

フェイト side

あの戦いの後。

疲れた私たちはとりあえず寝ることにした。

遥は睡眠魔法が切れても疲れたのか寝てしまっている。

ふふふ、寝顔、可愛いなあ・・・。

今は朝。

私は目が覚めたけど、遥はまだ寝ていた。

私は既に気が付いていた。

私は、遥の事が好きなんだ。

ひとめぼれのようなものだけれど。

そりゃ、殆んどの世界では同性愛は異端とされたり差別めいた扱いを受けるけどさ。

・・・私は好きなんだ。

この気持ちさえ本物ならば、きっと遥も応えてくれる。

・・・この考えが不要だった事を知るのはもう少し先の話だった。

遥 side

目が覚める。

僕は、寝ていたのか？

・・・そうだ、先行したらフェイトさんが既に僕が来た時のための算段を立てていて、情けなくも僕は捕まっちゃったんだっけ・・・。

「あ、目が覚めたんだ？」

「ええと・・・フェイト・・・さん・・・！？」

思わず自分が寝ていたベッドから起き上がり、デバイスを起動・・・あれ？

「あれれ？」

「ふふ、人質に戦う力は残さない、でしょ？」

確かにそうだけれど、僕は男の子、フェイトさんは女の子。

「もし僕が直接仕掛けたら？　がおーって」

手を使って表現してみる。

「・・・襲うの？」

何故かフェイトさんは顔を赤らめてしまった。

「・・・まあ、それはそのうちどうにかするとして」

何を言われているか分からないのに背筋に冷たいものが走ったのは

フェイトさんがうつとりした顔をしているからなのだろうか。

「試してみる？」

「・・・え？ ええと、えいやっ」

逆に誘われてしまった。僕は男の子、彼女は女の子――

――！

「ふにやつ！？」

「ふふふ、だから言っただでしょ？」

とりあえず手を後ろ手にするくらいには僕にだって、そう思った僕が馬鹿だったのかもしれない。

フェイトさんの腕はまったくビクともせず、逆に押し倒されてしまった。

そういえばフェイトさんの方が体大きかったのを失念していた。

・・・魔法を使わない限り反抗は無理、か

「・・・はあ・・・」

押し倒した体勢でフェイトさんがうつとりしたような恍惚としたような表情を浮かべている。

その表情が怖いです恐いですコワイです。

すっかり怯えてしまって泣きかけているが、それはフェイトさんを喜ばせているだけらしい。

「フェイトー、遙は目覚め――」

そんな時、アルフさんが部屋に入ってきた。
助かった……！

「すまない、邪魔したね」

そそくさと退散していくアルフさん。

「いや、フェイトさんをなんとかしてくださいっ！？」

数分後

「助かりました、アルフさん」

「ははは、確かに目覚めていきなりは酷だからねえ」

なんとかアルフさんに助けてもらえた。

フェイトさんは不満顔で、「むー、じゃあお風呂と寝る時は一緒だもん」と言っていた。

どうしてだろう。寒気が止まらないや……

今はリビングのテーブルに3人で座っている。

椅子が3つあったのは用意がいいからだよね？

「まずは、アンタの今後からだね」

「はい……人質……ですしねえ」

「本当はこういうの使いたいんだけど、別に魔法も使えないし、別にいらななくなってる」

そういつてフェイトさんが手元に置いてあつた大きめの鞆から何かを取り出す・・・首輪に手枷に足枷に少し長めの多分指を動かせなくなる鍵付きの手袋のようなものなど、色々と入っていた。

「遥が別にいい子にしていればいらなかった。悪い子だったらおしおきしなくちゃいけないんだけれどね」

その時にこそ、鞆の中身が使われるのだろう。

「ええと、質問なのですが」

「何かな？」

「これは何でしょうか？」

そう言つて左腕に付いた腕輪を指差す。

左腕に付けられているのだが、外れない。

「それは魔法の腕輪で、遥の魔法を封じる腕輪だね」

「デバイスは取り上げたけどさ、念話で助けを求められちゃかわわないし、アンタならデバイス無しでもある程度魔法を使えるだろう？」

「ちなみに、発信機の役割もしているから、私たちからは逃げられないよ？」

なるほど、だから外れないのか。
だとすると、脱出は家からでてとにかく走る、くらいなんだろうけ

ど。

さっきの体格差から考えると、きっと走っても僕の方が遅いのだろう。

・・・おとなしくした方がいいのかな。

ちなみに、服はあの子のまま、例のコスプレ服のまま。

フェイトさん達をきくと驚いただろう。

フェイトさんは逆に喜びそう、と思ったのは、フェイトさんの性格がわかってきたからかな。

「次、です。 学校はどうすれば・・・」

「ああ、それなら既に学校に連絡してあるよ。 フェイトに感謝だね、その点は」

「別に、遥の大人になった時の声を想像しただけだよ？」

それ、凄いやね？

どうやって僕の通っている学校から何やら調べたのは分からないけれど、きつと聞いたら後悔するので聞かないことにした。

「質問は以上かい？」

「あ、はい。」

「今後はジュエルシード探しの時や例の白いのが襲撃に来た時以外なんかはアンタは部屋に待機、ということだね。」

「了解しました」

「外出時は特例で腕輪を外すかもしれないしデバイスを渡すかもしれないけれど、何か変な事したら・・・分かってるね？」

「・・・はい。」

「じゃあ、この話は終わりっ！遥はあの後寝てたんだし、お風呂入るっ！」

そういつて僕を立たせ、いい笑顔で腕を引つ張る。

今は時計を見る限り、あの後数時間経って昼前、といった所なのだが、慣れない体験もあったので汗だらけだったりする。

しかし、それは女の子どうして入るもので・・・！

「フェイトさんは女の子なんですから、僕と一緒に入っちゃまずいんじゃない・・・」

「え？何がいけないの？」

きよとん、とするフェイトさんにアルフさん。アルフさんまで事情が分かってないようだ。

いい加減、慣れたけれどさ。

「僕・・・男の子なんですが・・・」

ぴきいっ

その時、確かに空間が凍った気がした。

「「ええーっ!?!」」

「別に、騙すつもりはなかったんですが・・・」

「遥・・・が・・・男・・・？」

フェイトさんがつわ言のように呟いた。

「さて、お風呂に入ろうか」

再び笑顔で引つ張るフェイトさん。・・・あれ？

「僕、男の子って確かに・・・」

「まあ、フェイトは遥のことが本当に好きだったってことさ。諦めな」

「でも・・・」

「じゃあ力づくで行くね」

そう行つてフェイトさんは僕を抱き上げ、そのまま所謂お姫さま抱っこで部屋を出て行った。

「遥の裸・・・ふふふ・・・」

「嫌あーっ!？」

その後、女の子の悲鳴と嬉しそうな声がそのマンションに木霊したという。

囚われのお姫様。（後書き）

久しぶりの執筆でまた書き方が変わった気がします。うわぁぁん。

やっぱりオリジナルなお話を組み立てるのは大変で、苦手のようです。

今回は遥の今後と、同性愛じゃなかった！ってお話でした。

相当無理のある展開かも知れませんが、（人質って言ったら後ろ手に縛られて人以下の扱いってイメージですが 子供とその使い魔だしこんな感じでいいのになって。

次回はまた原作に戻ります。

遥を人質らしく扱いが甚だ疑問ではあるのですが。

それでは、駄文を読んでいただきありがとうございました、お疲れ様でした。

ふたりの思いと救出と。(前書き)

さて、今回もどうにか更新です。

遥「不自由があまりない人質っていうのも・・・」

不自由をご所望です？(首輪用意

遥「・・・ごめんなさい」(向こうでがっかりしているフェイトさんを見て見ぬふりしつつ

今回は強引に次元震を起こしたのでちょっと強引な展開にしたいと思います。(いつもそうだよなってツツコミは無しの方d(ry

遥「あはは・・・では、どうぞーっ。」

ふたりの思いと救出と。

なのは side

遥くんが攫われちゃったあの日。

あまり騒がせてはいけなかった私とユーノくんは、遥くんは事情があつて先に帰ってしまったと嘘をついてしまったのでした。

遥くんのご両親と一緒に帰っていつて、朝には少し遠くに出かけてしまふ、と。

旅行に持つていったお荷物は一時的に私の家で預かることになりました。

あの日以来、もう二度とこんな事を起こしちゃいけない、と。

決心した私はいつもより多く、そして熱心にユーノくんと魔法の練習をしています。

遥くんを取り返すために。

遥くんは今どこにいて、何を思っているんだろう。

フェイトちゃんのこととはよく分からないけれど、きっとそこまで酷い扱いは受けていないとは思ふの。

遥くんは私たちの助けを待っているのかな？

それとも、自分なんてどうでもいいからジュエルシード探しをして欲しいと思っているのかな？

遥くんだから、そう思っている気がするの。

遥くんがいなくなつてから、みんな元気なくなっちゃったんだよ？
アリサちゃんは「遥が帰ってきたら一発殴ってやるんだからっ！」

つて。アリサちゃんのグー、とっても痛いんだよ？

すずかちゃんも「遙くん・・・ふふふ・・・」って明後日の方向を向いて笑ってるんだよ？すずかちゃんはどこの方向を向いてひとりで笑ってる時ってとっても怒ってるんだよ？

でも、それは私のせいで、私が原因で・・・。

魔法のことがあるから話せない自分が情けないです。

私が甘ったれていたからみんなに、遙くんにいっぱい迷惑かけて。だから私はもう甘ったれない。

私は遙くんを助けたい。そして、フェイトちゃんとお話したい。もう、お話だけで戦いたくないなんて考えない。

戦って、お話、聞いてもらうの！

そして、遙くんを返してもらうの！

遙 side

夕方。

さほど人質らしくない生活（ご飯は冷凍食品だったそうなので、僕が作ってみたり、空いてる時間は家事してみたり）を送っていた僕は、そのお話を聞いて、とうとうか、と思ってしまった。

ジュエルシードを発見、強制発動させて封印する。

僕はデバイスを取り上げられた状態、腕輪をつけられた状態で同行することになった。

わざわざ僕を連れて行くことも、とは思ったが、直接連れていくことで揺さぶりをかけるつもりでもあるらしい。

つくづく自分が情けなく感じる。
どんなに家事をしていても、仲良くしてもらえても、結局は人質なのだ。

後ろ手に手首を縛られ、アルフさんに抱えられ出発する・・・だ
ど。

帰ってくるのが遅れると思ったので家事を一気に終わらせて夕食
まで作り終わって冷蔵庫に入れてから出発したので、凄く・・・疲
れた。

縛られた手首もフェイトさんの経験の力なのか全然痛くないし・・・
びくともしないけれど。

抱えて貰って楽な体勢だったので、つい、うつらうつら。

「遥、着いたよっ！起きなっ」

ゆさゆさ。

「ふあああ・・・ごめんなさい、寝てました？」

「まだ真夜中でもないのにこんな時間に眠くなるくらいに働かせち
やって申し訳ないんだけどね。家事が誰も出来ないから、つい、ね
・・・」

「あはは、家事は楽しいですし別に構わないですよ。・・・ええと、
今ジュエルシードを強制発動させた所、ですか？」

「まあ、そうだね。結構広い範囲に発動させたことを知らせること
になるから、例の白いのが来るかもしれないね」

なのはさんのことなのだろう。

名前を教えてもいいのだけれど、聞かれてもいないし、きっと本人が自分から話したいだろうから言わないことにした。

お互いの名前を教えあう事からきつと始まるんだろうから。

「・・・来ましたね」

「その、ようだね」

遠くから高速で接近、する白い女の子。

白いバリアジャケットを纏ったなのはさんだった。・・・あれ、今日は肩にユーノさんが乗っかっていない・・・？今日は都合が悪いのかな？

「・・・！遙くんっ！」

「ジュエルシードから手を引いて下さい・・・遙を傷つけなきゃいけない」

「この前は自己紹介できなかったね、フェイトちゃん。私は・・・高町なのは。理由を・・・話してよ。私たち、民間協力者。力になれるかもしれないから・・・」

まっすぐにフェイトさんの目を見て言うなのはさん。

フェイトさんの視線が揺れているのが分かる。

まだジュエルシードを集める理由を聞いていなかったけれど、確かにみんなが集められたらどんなに楽だろう。

危険であることは既に分かっているようだったし・・・。

「ダメだ、フェイト！ 私たちの最優先事項はジュエルシードの確保だよ！」

隣で僕を抱きかかえているフェイトさんが声を荒げる。
確かに、そうだけど・・・

「ごめん、アルフ・・・そういう、ことだから」

再び、強い意志を感じさせる表情でデバイスを構えるフェイトさん。

「もし、私が勝ったら・・・ただの甘ったれた子じゃないって、思ってくれる？」

決心した、強い意志でレイジングハートさんを構えるのはさん。
その決意には、僕が攫われたことも関係しているのかと思うと、少し胸が痛くなる。

2人とも既に戦う気だけれど、僕の事、忘れてませんかフェイトさん？

2人とも今すぐにも戦いを始める・・・そんな時だった。

「止まりな！こっちは遥がいるんだよ！」

ごめんよ、遥。そう、小さく呟いたアルフさんが僕の片足だけ持ち、逆さ吊りの要領でブラブラさせた。 ゆ、揺れる・・・！

「あ・・・」

「は、遥くんっ！？」

2人ともすっかり忘れていたらしい。そう顔に書いてある。さて、これでなのはさんは動けなくなってしまった。

このまま、フエイトさんがジュエルシードを確保して終わり、そう思っていたのだが。

「……………ここだっ！」

突然聞こえた声。

この声は…………

突然アルフさんの体が吹き飛ばされ、僕を離してしまう。落下を始めた僕を再び抱えたのは。

「…………ユーノさんっ！」

「ごめん遅れた。怪我はない？」

どうやらユーノさんが体当たりしてアルフさんを弾き飛ばしたようだ。

だから一緒にいなかったのか。

ユーノさんは僕を確保してすぐに封時結界を展開し、縛られていた手首を開放する。

「この腕輪はどうやら解除に時間がかかるね。ごめん、今回は我慢して」

「あ、はい…………。ありがとうございます、助けてくれて」

「ははは、君がいないとみんな元気が無くてね・・・なのはっ！全力前回、だよっ！」

「うん、ありがと、ユーノくんっ！」

力強くレイジングハートを構え、フェイトさんとの戦闘を始めるのはさん。

砲撃魔法だけではなく、いつのまにか魔力スフィアの生成や射撃魔法での牽制も出来るようになったようだ。

僕の取り得を取られた気がしたのは秘密です。

「よくも遥をつ！」

おっと、こちらにアルフさんが向かってきた。

いつのまにか僕がそちらの味方にいるような口ぶりだった。

・・・確かに、楽しくはあったんだけど。

「ちょっと待っててね、遥」

そう言っつてユーノさんは人1人入れる小型の結界を僕に展開し、離れて戦闘を始める。

どうやら今回はユーノさんもアルフさん対策をしてきたのか、拘束魔法を高速で展開できるようになっていた。

それぞれの戦闘ではそれぞれ拮抗していたが、なのはさんとフェイトさん、お互いが射撃魔法を被弾し、吹き飛ばされた時に戦局は大

きく動いた。

離れた距離からの戦闘維持は不利と判断したのか、お互いがジュエルシードに向かって高速で向かったのだ。

お互いが射撃魔法を放ちつつ、ジュエルシードに向かい――

「いけない、なのはっ！」

お互いのデバイスがジュエルシードに触れた時、眩い閃光がジュエルシードから放たれ、フェイトさんとなのはさんはその閃光――ジュエルシードで暴走した魔力に吹き飛ばされ、近くで結界魔法の中にいた僕も結界魔法を抜かれて吹き飛ばされてしまった。

「うわあああつ!？」

そのまま吹き飛ばされた僕は、たまたまなのかユーノさんの近くに吹き飛ばされ、再び抱きかかえられた。運がいいのかな？

お互い満身創痍の状態で、デバイスも既に機能できないほどにボロボロだったが、フェイトさんがジュエルシードに向かう。

「ジュエルシードを集めて帰るんだっ、母さんのところに……！」

素手で封印……無茶だ！

しかし魔法の使えない僕には何も出来なく、魔力を全て放出したのか意識を失ったフェイトさんをアルフさんが抱きかかえ、なのはさんを一睨みし、転送魔法で去っていった。

……あ、僕も……ちよつと辛い……かな。

そして、僕も意識を失った。

ふたりの思いと救出と。（後書き）

結局直ぐに救出されることになってしまいました。
あまり今回は病んでないフェイトさんでした。

遥「悪い事・・・じゃないよね・・・？」

いや、そうなんだけれども。

なんというか、今回も頑張ってはみましたが微妙な出来ですねえ・

・w

あ、今回以降もちゃんとフェイトは病みますよ！（誰に言っている
なのはさんにもいつかは・・・とか思ってる私は末期ですね、はい。

遥「大変なことになるからやめてーっ!？」

さて、今回は以上です。

いつも以上な駄文を読んでもいただきありがとうございました、お疲れさまでした。

水色の魔力光の少女と赤色の宝石と「だれが少女だ！」（前書き）

お久しぶりです。夏休みの課題なんて嫌いです。

遥「あはは・・・お久しぶりです。」

なんとか書けそうなので頑張ってみます。

今回はなのは側メインです。

あと、クロノくんが出てくるのは次回です。

今回はちよつとした日常話＋ のつもりです。

そういえば、非常に今更なのですが、作者があっさりとした話が好きなので、これ以降もおそらくキャラクター毎の心理描写を楽しんだりとか出来るようなお話は書けないと思います。

申し訳ないです。

シリアスよりもギャグやほのぼのとして簡単に読めるお話を目指しています。

遥「作者曰く書くのは苦手ですけどね・・・では、どうぞっ
！」

水色の魔力光の少女と赤色の宝石と「だれが少女だ！」

遙side

「知らない天井・・・ではないなあ」

「にはは・・・おはよう、遙くん」

目が覚めて最初に目に入っただのは知らない天井・・・ではなくなのはさんの部屋の天井。

次に苦笑しながら僕の顔を覗き込んできたのはさんの顔だった。あ、ユーノさんが肩に乗ってる。

「ええと・・・あの後・・・」

「ええとね、ジュエルシードはフェイトちゃんに持っていていかれちゃったから、私は遙くんをおぶって帰ってきたの。でも、遙くんの家、開かなかったからうちで、ね。」

「なるほど・・・ありがとうございましたっ」

悪い事しちやっとなあ。

次は、自分の身は自分で守れないとなあ・・・

「う、ううん、大丈夫なの！」

「・・・？」

普通に笑って見たつもりなのに、何故か凄い勢いで顔を背けてしま

ったのはさん。

何故か肩に乗ってるユーノさんが苦笑しているし。

「そうですか。 ええと。 僕をなのはさんがおぶったんですか？」

「うん、そうだよ。 遙くん軽かったよ？」

「ちょっと・・・ショックです・・・」

華奢で運動が苦手な女の子でも軽々と運べる僕って・・・

「だ、大丈夫なの！華奢で可愛らしくていいと思うの！」

「それは女の子の基準っ!？」

「あはは・・・ドンマイ、遙」

ユーノさんが頭の上に飛び移ってぽんぽんと頭を軽く叩いて慰めてくれたのがとても嬉しかった。

・・・なのはさんの部屋のベッドの布団、温かいなあ。 なんだか良い匂いもするし・・・ってあれ？なのはさんの部屋のベッド？僕が？

「うわああああっ!？」

バサッ！と勢いよくベッドから飛び出して床に着地する僕。 なのはさんは驚いている。

「ど、どうしたのっ!？」

「なんでなのはさんのベッドっ!？」

「うん。いけないのかな？」

「僕が・・・おかしいのかな・・・」

「あはは・・・」

ユーノさんの苦笑を聞きながら、どうして僕はこんなにも女の子なのだろうと考えていた。

なのは side

何故か遙くんが落ち込んでいるの。

フォローしたらもっと落ち込んでしまったの。

・・・どうしてこうなったの。

「と、とりあえずなのっ！今後のことなんだけど・・・」

ちよつと強引に話を変えたの。仕方ない事なの。

「あ、それなら僕が。」

「うん、ユーノくん、お願い。」

「なのはと僕は昨日の戦闘で魔力を大量に消費しちゃったから数日はまともな戦力にはなれないんだ。レイジングハートも損傷してい

るけれど、なのはが残り少なかった魔力を使って修復に充てたから半日くらいで元に戻るね。」

「それでは数日間探索だけで封印と回収はしないのですか？」

「しばらくお休み、と言いたい所なんだけどね。きつとあつちはあまり休んでいられないと思うんだ。ジュエルシードに並々ならぬ執念を抱いているようだからね。」

そこまで言つて遙くんが考えはじめたの。

「僕が1人で、つてことですか？探索はともかく封印は自信ないのですが・・・」

「こんな時のために僕は君に封印魔法を教えたんだよ？それに大丈夫、レイジングハートを持たせるから」

《セットアップは出来ないので戦闘は行えませんが、魔法の行使などについては補助くらいなら出来ます》

「そ、そうなんですかつ……。ではよろしく願います、レイジングハートさん。」

《ええ、宜しく願います、ハルカ》

レイジングハートが離れて行っちゃうのはちょっと寂しいけど、これも仕方ないと思うの。

ユーノくんが言うには適合率も高いそうだし。

と、いう訳で翌日の放課後。

朝の学校では文字通り大変な目にあつた。

アリサさんには教室に入った瞬間にドロップキック。

そのままぽかぽかと叩かれた。

なんとか謝って離したら、今度はさすがさんが抱きついてきた。

なんだか少し見ない間に大胆になりましたねさすがさん。

こんなんだから未だにクラスのみんなは僕を男の子だと認めてくれないんじゃないだろうか。

その後休んだ授業の分のノート等をコピーして纏めてくれたものを渡してくれた2人にはとても感謝していたり。

そんな学校も終わり、今、レイジングハートさんをなのはさんから受け取って海鳴のあたりを歩き回っています。

と言つても反応をポンポン感じるわけもなく、念話でレイジングハートさんと話しながらの探索。

どうやらレイジングハートさんはなのはさんのお姉ちゃんのようなお母さんのような、そんな印象です。

「この前の戦闘でなのはさんがめざましい成長をしていたと思うんですが、一体なにがあつたんでしょう?」

《マスターが決心したようで、今まで以上に全力で魔法の練習をし

ていましたから。その決心にはハルカが攫われたことも関係しているようですよ」

「それはそれでなんだか複雑ですけど・・・」

《ですがやはり私は貴女が戻ってきて嬉しく思いますよ。マスターも嬉しそうですし、ぎこちない笑みを浮かべることもなくなりましたし》

・・・なんだかSheって聞こえたぞ。

「僕は男ですよ。・・・それは僕も嬉しいです。情けない話だとは思いますが・・・」

《物的な証拠はありませんから。・・・急速な成長といえば、貴女ものでは？通常習得の難易度の高い拘束系の魔法や探索系の魔法の熟達。それに封印系の魔法もすこしづつ上達しているようですし。加えて初歩であっても射撃魔法を習得。魔力量言えばマスターは非凡な才能を持っていますが、貴女の魔法の上達速度もとても優秀だと思います》

「あはは、ありがとうございます・・・。物的証拠がないならあそこで脱いで見せましょうか？」

あっちの茂みを指差す。冗談のつもりなので、本気ではないのだが。《大変興味深いです、遠慮しておきます。私の興味なんかでハルカやマスターをはじめとするたくさんの方を悲しめたくありませんから。》

「まあ、冗談ですから。・・・あ、レイジングハートさん。」

《ええ、ハルカ。ここから北に560メートルあたりに微弱な魔力反応を確認しました。ジュエルシードの魔力反応と一致しました。・・・行きましよう、ハルカ》

「All right, my master.ってね？」

《デバイスに従う魔道士ですか。・・・いいかもしれませんね》

「いいのかっ!？」

実は話してみるととても楽しいレイジングハートさんと軽口を言い合いつつ、反応のある所に向かう。

「・・・ここですね。レイジングハートさん、行きますっ!」

《ええ、ハルカ。封時結界、展開》

レイジングハートさんの声と共に、封時結界が展開される。これで、後は暴走しないように封印するだけだ。

《暴走の反応はありません。ハルカ、封印を》

「はいっ!ジュエルシードシリアル??、封印っ!」

呪文を唱え、封印を開始する。

レイジングハートさんは展開してないので、右手を前にかざし、左手に握られているレイジングハートさんを胸のあたりに。

デバイスは取り上げられたままだ。

胸の前に持っていたのは魔力の源であるらしいリンカーコアの近くにあったぼうがいかと思ったからだ。

《封印開始。・・・少し魔法がブレていますよ》

「・・・わわっ・・・う、んんっ・・・！」

《進度、良好。問題、特に無し。封印、完了》

封印の完了したジュエルシールドがレイジングハートさんの中に吸い込まれていく。

完了、と。結界を消す。

《本格的な補助もないので暴走の警戒をしていたのですが、流石ですね、優秀です。マスターには劣りますが》

「ありがとうございます。・・・なのはさんがとても大好きなんです
ね」

《それは少し違いますね。私はマスターを尊敬しているのです。それに、彼女が私のマスターですから》

「そうなんですか。では、帰りましょうか」

《傾いた夕日は、何故か赤い宝石のようなものと親しげに会話する危なげな幼女を茜色に染めていた。》

「誰が幼女だっ!？」

水色の魔力光の幼女と赤色の宝石と「だれが幼女だ！」（後書き）

と、いう訳でまた変な展開になりました。

私の中のレイジングハートはこんななのです。

ハルカには親しく、でもマスターをすこし過剰に信頼した、お姉さんのような。

デバイスと言うのは本来あまり話さないイメージですが、私はデバイスが好きなので・・・（笑）

次回はあまり間をあげず投稿できると嬉しいです。頑張れ、私！w

突然の再会（前書き）

さて、次話なのです。

そろそろクロノくんの出番でしょうか。

キャラクターが増えると表現が怖いです。

一応クロノくんは好きなのですが、さて、みなさんとは合うのかどうか・・・w

余談ですが、私は残念ながら鞭で以下略なシーンが苦手ですので、直接表現はしないつもりです。

ごめんなさい。

では、どうぞつ。

・・・なんだかどんどんチート化してるな、遥・・・

突然の再会

遙 side

レイジングハートさんと一時的に一緒に行動するようになってから数日。

学校ではずかさんやアリサさん、なのはさんいつも通り行動していた。

魔法関係で色々あるから隠し事は増えちゃったけど、なのはさんも僕もそこまで深刻な状況ではないので、たいして問題も起きなかった。

でも、いつか機会があったら話すつもりでいる。

僕らが成長したらユーノさんの話す魔法文化の発達した世界に行く機会もあるだろうから。

でも、僕にはいくつか気がかりな事がある。

ひとつに、僕の両親。

デバイスを置いていったのだから間違いなく魔法関係者なのだろう。今回のお仕事は長らく帰ってきていないので、きっと魔法を実際に長期間行使するお仕事なのかもしれない。

・・・無事だといいいんだけど。

ふたつめ。フェイトさん達のことだ。

危険を冒してまで母親のためにジュエルシードを集めている。

以前攫われたあとそんな事を言われたのだが、明らかに危険で、度を過ぎていると思う。

それでもフェイトさんは頑張っている。

もし人でなしな人だったら、どうにかして、考えを改めさせたいと思っている。

会ったこともない人に対してそこまで出来るとは思わないが。

それでも。

僕に何かできるのなら - - - - -

- - -

フエイト side

母さんに昨日久し振りに会った。

集めたジュエルシードを渡したけれど、全然数が足りないと怒られてしまった。

叩かれた鞭も、痛かったけれど、痛くない。

母さんはもつと辛かったはずなんだから・・・。

傷はアルフに治癒魔法を使ってもらって今はほぼ完治している。
うつすらと傷痕は見えるけれど・・・。

もう、失敗しない。

今度こそ、母さんを喜ばせるんだ - - - - -!

遥 side

夕方。

無事魔力も回復して普段通りになったのはさんとユーノさんと一緒になのはさんの部屋にいる。

どうやら今両親がいないことはなのはさんの両親も分かってしまったようで、寝泊まり以外はほぼなのはさんの家で生活している。

士郎さんや桃子さんには家で生活しないかといわれているが、そこまで世話になるのも悪いので、家事や翠屋でのあまり重要ではないお仕事を手伝うことをこちらからお願いして、今に到る。

料理は出来てもお菓子を作る経験なんて殆ど無かったので仕方ないと思う。

もし出来てもそうやらせてもらえる仕事ではないのだが。

最近はジュエルシード探しに進展はなく、今日も夕ご飯のお手伝いをして、洗い物をして、頑張つてなのはさんとお風呂に入るのを阻止してーとても大事、と考えていたのだが、突然の魔力反応に、その思考は中断されることになる。

「……魔力反応っ！フェイトさんか……？」

「行こう、なのは、遥！」

「うんっ！頑張ろ、レイジングハートっ！」

《ええ、マスター。頑張りましょう。》

ちよつと散歩に出かけてくる、と告げ、僕らは魔力反応のあった地点まで走る。

走る速さは僕の方が上だ。流石にこんな所で女の子に負けたくはない。

そして、到着したのだが・・・

「巨大化、してるね・・・」

「そう、ですね・・・」

《ジュエルシードの暴走した魔力を吸収しているようですね》

何故か最近よく話すようになったレイジングハートさんの推測を聞きつつ、チェーンバインドを発動させ、巨木の一枝を拘束する。

僕はセットアップできないため、そこそこの距離からバインドを放つたため、あまり長時間は捕獲できないが、一瞬あれば十分だ。

「なのはさん、射撃を！」

「うんっ！」

チェーンバインドが破られると同時に、なのはさんの射撃魔法が枝に命中。

魔力ダメージであるため、枝は折れないが、どうやらないしてダメージもないようだ。

「本体の封印をするべきなのかな・・・？ユーノさん、なのはさん

の援護をお願いします！目標はジュエルシードの封印で！魔力ダメージで弱体化させるのも有効だと思いますが、最終目標はジュエルシードです！」

肯定の合図を二人から受け取り、僕はフェイトさん達となのはさん達の間位置へ走りだす。

まずは共闘すべき、という意味でもあるし、フェイトさんの手助けをしたい、という意味でもある。

チェインバインドの短時間差での連続発動。

ユーノさんからは天武の才とまで言われたが、ユーノさんの方が強度が今のところ上だ。

相変わらず長距離なので時間を稼ぐためであるが。

「はあああつ！・・・以外ときつかったり・・・」

こちらに襲いかかってきた鞭のようにしなる枝を横つとびでかわし、予め設置しておいた拘束魔法を発動させ、枝の動きを止める。

なんだか随分と魔法の行使に慣れてきた気がする。

「・・・あ、ふたりが本体に近付いてきた。」

ギリギリの位置で援護するというのは、相手が離れたらこちらはその差を埋めることになる。

拘束魔法の強度を確認しつつ、固定した枝の上を走って僕も本体に向かう。

結構本気で行使した魔法だからそう簡単には解けないはずだ。

アルフ side

何てことをしているんだアイツは。

デバイスはまだこちらの手にあるのだから、無力化できたと思ったんだが・・・

バリアジャケット無しで、なんとあの白いのだけでなくこちらの援護までしてくる。

襲いかかってきた枝を魔法で固定し、足場にして本体にまで向かっている。

正直、冷汗モンだね。

だから、思わずフェイトに言ってしまった。

「ちょっと遥んところ行ってくる」

「本当は私が行きたいんだけど・・・お願い、アルフ」

遥 side

「さて、無茶しているアンタのお守りにやってきたよ」

「ありがとうございます。僕にはフェイトさんやなのはさんの方が無茶していると思いますが・・・」

「3人とも同じようなもんさ・・・まあ、あの樹をなんとかするま
でだけど、よろしくな」

「はい、こちらこそ」

アルフさんに担いでもらって、飛行状態で樹まで向かう。

防御は一任できるので、アルフさんのいないフェイトさんを中心に
保護しつつ、本体に向かっていったのだが・・・

「・・・一番に着いちまったな」

「そうみたいですな・・・」

なんだか妙に息が合ったので、一番に到着してしまった。

「あー・・・封印しちゃいますね」

「アンタ、封印まで出来んのかいつ!？」

そりゃ自分の成長速度には自分で驚くが、これは以前レイジングハ
ートさんに教えてもらった結果だ。

補助してもらった後に色々教えてもらったのでかなり短期間で出来
るようになった。

自分でも驚くほど手早く封印し、樹は元に戻る。

さて、ここからはふたりの時間だ。

なのはさんとフェイトさんは2人で向かい合い、何かを話している。

僕は即席の治癒魔法の準備でも・・・

「折角だし、アタシらも一回、やらないか？」

「あはは・・・そうなりますか」

右手をグー、左手をパーにして打ちつけ、準備は出来てるさ！なアルフさんを見て思わず苦笑してしまう。

そして、アルフさんからデバイスを渡される。

「・・・いいんですか？」

「同じ相手に何度も負ける気はないからね。それに、勝ったらアンタはまたデバイス毎こつち側さ」

何となくアルフさんらしい。

「じゃあ・・・行くよッ！」

アルフさんが拳を振りかぶり、こちらは高速で向かってくるのと同じ時に、僕もラウンドシールドの準備をする。あちらも始まるどころ・・・だが・・・

パシィッ！

突然現れた見覚えのある女性に僕とアルフさんの手首を掴まれる。

「-----管理局執務官、クロノ・ハラオウンだっ！」

なのはさん達側からそんな声が聞こえてくる。あちらも止められたようだ。

双方のデバイスを止めるなんて、物凄い技量の持ち主のようだ。

「管理局執務官、姫宮薫よ。――ここでの戦闘は危険すぎるわっ！すぐに武装を解除しなさいっ！」

この人は・・・

「母・・・さん・・・？」

「ヒメミヤ・・・アンタの母親かいっ！？」

僕は、母さんと不思議なところで再会を果たしたのだった。

突然の再会（後書き）

と、言うわけで、遥の急速すぎる成長とお母さんの登場回でした。

遥「自分でも異常じゃないか、って思っちゃうよ・・・」

主人公の特権みたいなモノだけだね。

一応砲撃魔法とか使わないだけマシなんじゃないかなw

さて、今回登場したお母さんですが、容姿は遥がほぼそのまま成長した姿を思い浮かべてください。

バリアジャケットは一般局員のバリアジャケットが白くなった感じ
です。

さりげなく自己出張性の強いお方なのかもしれません。

さて、ではまた次回でお会いしましょう。早く会えることを私は願います。

要するに早く執筆したい。

母さんが最大の敵でした。（前書き）

更新が出来そうなので私はキーを叩くのでした。

薫さんについてのキャラクター設定も後で書く予定です。
というかキリのいいタイミングに一気にやろうかなって・・・w

今回もあまり本編は進まないかも知れません。
戦闘の無いシーンの方が書きやすい、のかな？

では、どうぞ。

母さんが最大の敵でした。

クロノ side

僕とエイミイ、薫執務官、母さん……リンディ提督は、先日起きた第97管理外世界……地球で起きた次元震について、モニターに映し出された情報を見ていた。

今回起きた次元震は、規模は小規模だが、それでも見逃せるものではなかった。

事の発端は、報告によるとロストログア・ジュエルシードの運搬を行っていたスクライア族の者が、事故により地球に落としてしまい、現地協力者とその回収を行っていた際に、ジュエルシードを狙う魔道士と交戦、それによって起きた次元震である、ということだった。

「無謀、ね」

「ええ、僕もそう思います、薫執務官」

「もう、“お母さん”と呼びなさいっていつも言ってるじゃない」

「貴女は息子がいたじゃないですか……」

余程出来が悪い息子なのか無愛想なのか分からないが、僕の母親の前でそういうことを言うのはいい加減やめて欲しい。

僕の実親が目の前にいるというのに。

まあ、その母さんも楽しそうにニコニコとしているだけなのだが。

まず、この事件は、スクライア族の少年、ユーノ・スクライアが不注意によって引き起こした、と本人から報告があがっているが、関係者達はみんな仕方の無い事、やあの子だけが悪い事じゃない、などと証言しているようだ。

それを現場監督を請け負っていたユーノ・スクライアが1人で責任を感じ、単身で地球まで行った。

この時点で無謀だ。

とてもではないが、1人で出来る事じゃない。

その上、現地で少年少女2人を魔法に巻き込んでしまい、その上で起きた次元震だそうだ。

報告だけ目を通せば、単なる愚か者。

しかし、それでも起きたことに対する償いは評価できると僕は考えている。

恐らく上層部には理解されないだろうが。

しかし僕の興味は、他の事に傾いていた。

現地で戦闘を行った魔道士たちのデータだ。
送られてきた映像を確認していたのだが、

「うっわぁ、すごいねぇ……。この黒い子も白い子も、最大魔力量ではクロノ君を超えてるよ」

「魔法は状況によって最適なものを選択することで真価を発揮する
……どちらも物量戦のようにしか僕には見えない」

「黒い子とはかく白い子は現地で魔法覚えたてだからね。魔力量に頼っちゃうのは仕方ないんじゃないかな？」

「確かにその通りなのかもしれないが……。それで、この3人目は、

本当に素人なのか？」

「あら、我が娘に興味があるの？」

「息子ではありませんでしたか？……魔法の種類は限られているのだろうが、それでも他の魔道士より魔法の選択が適している。本当に短期間で習得したのか？」

「うふふ、遥は優秀なのよ？まさかここまでとは思わなかったけど」画面には黒いバリアジャケットを着ている姫宮遥が映し出されている。

他の2人と違い魔力量が高い方が有利な砲撃魔法等よりは、拘束捕獲系の魔法を使用する所が多いようだ。

この魔道士もかなり優れた魔力量だが2人には劣る。

しかし、頭を使ったのだろう状況に比較的適している魔法、驚いたのはかなり高速な魔法の行使だ。

映し出されている、ジュエルシードによって暴走した大樹との戦闘の映像。

その樹を抑えるためにかなりの速度でのチェーンバインド。

隙を作るだけなら最適とはいえないが、それでも限られた手札で必死に工夫して戦う姿には好感を持てた。

僕はいつのまにかこの幼女のような少年と肩を並べて闘う事を願っていた。

まだ未熟であるようだが、それは僕もだ。

きっと、切磋琢磨できるのではないだろうか。

おっと、話が逸れた。

「とにかく、次の戦闘の時には取り押さえる、ですね？」

「ええ、そういうことになるわね、期待しているわ、クロノくん、薫ちゃん」

「はい！」

遥 side

色々あったが、結局僕となのはさん、ユーノさんは執務官、という役職である、クロノ・ハラウンさんと姫宮薫……母さんについて来て、戦艦であるらしい「アースラ」に来ていた。結局フェイトさんとアルフさんは逃げ出した。

しかし、きっと時間の問題なのだと思う。流石に戦力の規模が違う。

「そういえば、ここはもう戦艦内で安全だ。バリアジャケットは解除して大丈夫だ。そのフェレットもどきも」

「あ、はい、分かりました」

なのはさんがバリアジャケットを解除したので僕も解除した。

「あ、はい、そうでしたね」

ユーノさんも人型になった。はじめて見たのだが、なのはさんがとても驚いている」

「ふ、ふえっ!? え、ええ、ええーっ!?」

――しばらくお待ち下さい――

ようやく落ち着いたので、艦長室に案内される。

途中母さんと久しぶりに話したが、なんというか全く変わっていなかった。

きっとクロノさんも苦労しているのだろう。

入った艦長室は、なんというか、純和風な部屋だった。

ミッドチルダ、という世界にも和風、という文化は存在するのかもしれない。

「あら、どうぞ、座って」

そのまま全員が座布団に座り、話が始まる。

自己紹介で、彼女は艦長である、リンディ・ハラウンだそうだ。

最初に彼女が沢山砂糖を入れた緑茶を飲んでいたが、あれは頭の回転を良くするためなのだろうか? いつか試してみたいと思う。

話は、なのはさんや僕への管理局などについての説明や、そのままこの事件の今後についてだった。

曰く、管理局は数ある次元世界を束ねる、地球という警察の規模が大きくなったような機関。

曰く、この事件は今後管理局が担当し、現地協力者である高町なのは、姫宮遙両名は通常の生活に戻ることに。

だそうだ。

その事についてなのはさんが今後も協力したい、と言い、周りに止められていたが、結局リンディさんに承認された。というか、話し方や表情からこれを狙っていたんじゃないかと思えてしまう。

ならば、僕のやる事は。

「では、僕も協力させてもらえませんか？結局僕も全く関係していない、とは言い難いですし、両親とも魔法に関係しているようですし早かれ遅かれ魔法には触れていたと思いますし」

思惑に乗ることなのかなあ、って。

「とても冷静で頭の回る子ね。羨ましいわ、薫ちゃん」

「うふふ、いいでしょう？」

なんだかあちらは母親同士の会話になってしまっていた。完璧にプライベートになっているような。

頭を押さえていると、

「お前も苦勞しているんだな」

クロノさんに小声で話しかけられ、なんだか同情の表情をしていた。

「高町なのはさん、姫宮遙さん。協力、感謝します。明日から本格的にお願いすることになりますので、今日はゆっくり休んでください」

い。それと、おふたりのお家への説明も明日、ね。魔法のことまでは話せないけれど、突然いなくなってしまうっては大変です」

「はーいつ」

「わかりました。」

「遙ちゃんは薫ちゃんと久しぶりにお話できるんじゃないかしら？」

「あ、はい、ありがとうございます。ですが僕は男ですよ？」

そんな事もあり、結局解散となった。

どうやらこの船は和の文化を取り入れているようで、大型の浴場などもあるようだった。

リンディさんや母さんはなのはさんと遙ちゃんと一緒に入れるわねー、などと言っただけなのはさんは喜んでいたが、みなさん僕は男ですよ？ちゃんをつけるのはなのはさんじゃないですかね？

クロノさんとユーノさんの同情の視線に苦笑いしつつ、母さんと一緒に母さんの部屋の中に入った。

寝るときはなのはちゃんとねーと言われて反論しなくなったが、そこは有無を言わせぬ母さん。・・・何もないといいのだけれど。

母さんとの話はいろいろだった。

魔法文化に始まり、あのデバイス、シールウィップについて。

あのデバイスは父さんの作った簡易デバイスで、父さんは「デバイスマイスター」という資格を持っているそうだった。

ちなみに本格的に魔法に関わった時のことを考えて、こっそりとリソナーコアを調べていたそうで、今は本格的なデバイスを製作途中

らしい。

――父さん母さんの強い希望でインテリジェントデバイスになるらしい。楽しみ。

何故だかシールウィップもすごくしっくりときたし、結局は僕に適したデバイスとなるのだろう。

「遙ちゃんもお友達増えたのね？良かったわ」

「ははは、みんな、魔法がきつかけ、ですがね」

「それでも作ったのは遙ちゃんよ？」

時間も驚くほど早く進み、気がいたらもう夜とっていい時間だ。

「あら、もうこんな時間ね。夕食はお風呂に入ってから食べましょう。なのはちゃんと入ってね」

「いや、だから僕となのはさんは・・・」

そんな時、ドアが開かれ、なのはさん達が入ってきた。

「遙くん、お風呂はーいろっ」

「すまないな姫宮。止められなかった・・・」

「あ、遙でいいですよ・・・止めていただいただけでも感謝ですよ」

「そうか。まあ、すまなかった」

クロノさんと会話していると、

「ほらほら、早く行きなさいな。なのはちゃんを待たせちゃ悪いわよ?」

「わわっ!?!」

母さんに押され、もたついた所をなのはさんが受け止め、そのまま正面に抱っこして部屋を出て行く。なんだか凄くなのはさんがニコニコしている。そんなに嬉しいのかなあ?

というかまだ会ってすぐなのになんだろうこのチームワーク。

「」

「あの、自分であるけますよ?というか恥かしいです、離して下さいっ!?!」

お姫様抱っこは流石に。

「大声出しちゃいけないの。それにこうでもしないと遙くんは入ってくれないのっ」

こうなったら、同情してたり苦笑したりして隣を歩いている男性陣に!

「すまないな、止められそうにない」

「ごめんね遙。僕の無理そうだ・・・」

おお、数秒で最後の砦がっ

自分の意志ではないものの、赤色の「女湯」と書かれた暖簾に向かっていることに気がつき、気分が滅入っている僕だった。

・・・きつと寝るときも母さんによって隣はなのはさんなんだろうな。

転送ゲートを担当しているエイミィさんって言う人に頼んで逃げ出してしまうのか。

・・・協力すると言った晩にそれも危険すぎるか。

「さて、私が脱がせてあげるのっ」

「自分で脱げますってばーっ!？」

(明日一番に魔法の訓練一緒にしないか？気分転換にもなるだろう)

(ありがとうございます、ハラオウンさん・・・!)

(いいや、クロノで構わない)

(クロノさん・・・!)

助けられなくても気にかけてくれているクロノさんはきつととてもいい人。

明日、頑張ろう・・・!

「早くはーいろっ」

「わわっ!？」

結局再びお姫様抱っこで脱衣場から運ばれていた。

とつかいつの間にお互いに裸に・・・？

「離してくださいー！？」

「・・・その日、可愛らしい悲鳴が夜中に戦艦中に響いていたとか。」

母さんが最大の敵でした。（後書き）

後半からなんだか集中力が途切れて大変な文章になってしまいました。ごめんなさい。

クロノくんは人の気持ちが分かって思いやりのあるいい人です。決してKYなんかじゃないのです。あれは職務ですし。

夏休みも終わり、私達学生は再び学校が始まりました。しかし気温的にまだ夏休みだと私は信じています。8月って100日以上あるものではありませんでしたっけ？

と、冗談は置いておいて、次回更新も早めにできたらいいですね。では、今回はこの辺で。

駄文ですが、読んでいただいてありがとうございました、お疲れ様でした。

はじめてのひとりでのたたかい（前書き）

前書きと本文が一緒になったという恥さらしをしてしまいましたので修正します

と、いうわけで前書きです。

初めてですよ。あとがきかいた後に前書き書くのって・・・orz
今回は初めてのソロ戦闘回です。

いつも通り残念な感じですが・・・

では、どうぞですっ。

はじめてのひとりでのたたかい

遙 side

さて訓練だ今日は訓練だ早く訓練だっ！

……目覚めてすぐ僕はそんなことを思っていた。

昨日は、あのあと強引に全身を洗われて、浴槽内でももがいていたので、（ほぼ常に抱きかかえられていた　くたくたになって直ぐに意識が朦朧となり、ほぼされるがままなのはさんの部屋で寝ることになってしまった。

気が付いてやばいと思ったのは深夜で、その時にはすでに抱き枕にされていて抜け出せなかったので諦めて寝て今に至る。

ここは戦艦内なので朝日などから時間は分からないのだが、なんとか見えたミッド製の電波時計は5時半頃を示していた。
クロノさんは起きてるのかな。ちよと念話してみよう。

（クロノさん、起きてますかっ？）

（ああ、丁度今起きた所だよ）

（おはようございます。……今から部屋を出て朝訓練……といきたい所なんですが……）

（ああ、昨日の状況を見れば分かるよ。……迎えに行くよ）

（助かります）

クロノさんに全てを任せたいとは思ってはいないので、なんとかなのはさんを起こそうとする。

「・・・なのはさん、起きてくださいっ・・・！」

小声でゆさゆさ。

「・・・ふみゆ。遙ちゃん・・・？」

ぎゅっ。締め付けが強くなる。

・・・ああ、完全に寝ぼけてる。

「僕は男ですっ・・・起きてください、僕はこれから訓練ですっ・・・」

「にゅ、離れちゃだあ・・・」

ぎゅぎゅぎゅ。

「あが、が・・・！苦しいですっ・・・！」

このままじゃ折れるっ！？

（く、クロノさんっ・・・は、はやくっ・・・！ぐ・・・！）

思念くらい平静を保ちたかったが、無理だった。

（分かった、すぐに向かう）

少し慌てた足音が聞こえ、ノックの後、扉が開かれる。

「朝早くからすまない、クロノ・ハラオウンだ。高町なのは、起きているか？」

「・・・クロノくん・・・？」

どうやらクロノさんの声で目覚めたようだ。

「遥とこれから訓練の約束があるんだ、すまないが、彼を解放してくれないか？」

「・・・訓練なら仕方ないの」

そういつて抱いていた力を弱めるのはさん。五体満足・・・！

「ごめんなさいなのはさん、行ってきます」

「うん、行つてらっしゃい遥くん」

どうやら完全に目覚めたようだ。

クロノ side

少し問題があったが、遥と2人でアースラの訓練スペースに着いた。しかし、彼はいつもこんな調子なのか？もしそうなら、とても大変な日々なのかもしれない。

「さて、準備運動は済んだか？」

「はい、完了しましたっ。」

「さて、訓練と言ったが、君は管理局の者ではないからね。僕は君の実力を見ておきたいんだ。君の支援能力は素晴らしいが、まだ個人での戦闘は見ていない」

「はい、分かりましたっ。・・・未熟な僕がどこまで出来るか・・・」

「別に、すぐに決着をつけようとは思わないさ。僕の力が君のためになっただけ嬉しいけどね」

「そういうことですかっ。ではっ・・・！」

以外にも、彼の方からの突撃で模擬戦闘が始まった。

鞭による読み辛い連撃。

それを僕は魔法を行使せず、回避とS2Uで受け流していた。

やはりこのあたりはまだ素人のようだった。

まだまだ甘い。

S2Uで攻撃を受け流した後、反撃を加える。

「くう・・・！」

その反撃は、回避が間に合わずかすり、少し飛ばされる。

「無理に接近戦をしようとするな！あくまで自分に適した戦い方を心がけるんだ！」

「はいっ！」

それを聞いた遥は距離をとり、魔力スフィアを展開、4つの魔力弾と共に、再びこちらに向かってくる。

しかし先程とは違い、左手を伸ばし、魔法を発動させたようだ。

彼が得意としている、魔法の高速発動。

複数のチェインバインドがこちらに襲い掛かる。

右腕を狙った攻撃を、シールドを展開して弾く。

しかし、それを狙っていたのか今度は魔力弾が左から来る。

それを回避する。

おそらく、防御させて位置を固定させるのが彼の狙いなのだから。

ならば、直ぐに離れた方がいい。

一度距離をとり、こちらも射撃魔法で応戦する。

彼は訓練場を走り回りながら、魔力弾に直接角度を変えつつ放つだけでなく、発射位置の角度も利用し、様々な方向から魔力弾が襲い掛かる。

妙だ。角度をつけるためだけに走り回っているのか？

既に彼の息は上がってしまっている。

「無理をしすぎじゃないのか？」

「はい、ここまでの量の魔法を使うのも・・・！戒めの鎖よ！」

「・・・なっ！？」

突然訓練スペース中に展開される魔方陣。

これを設置するために走り回っていたのか。

「いつけえ！」

僕に襲い掛かる無数の鎖。

一つでも引つかかったら他の鎖に引つかかって終わりだろう。

恐らくは彼の最高の一撃。

そしてそれを回避しきるのは困難。

ならば――――

「まだまだあッ！」

真正面からバリアを展開して防ぎきる！

幸いなのかひとつひとつの鎖に充てられた魔力量は少ない。それでも恐ろしい量なのだ。

ガキンッ！

無数の鎖とバリアが衝突する。

それは長い時間だったが、終わりが訪れた。
消滅する鎖に防御魔法。

僕はかなりの魔力量を消費したが、まだ戦闘を続行出来る。

「・・・駄目でしたかつ・・・」

もつとも、彼は耐えられなかったようだ。座り込んで肩で息をしている。

決着はついた。

「お疲れ様。とりあえず、あの量のバインドには驚いたぞ」

「長期戦は不利だと思ったんですよ。・・・失敗でしたが」

「いや、意表は突けると思う。しかし、やはり長期戦で相手の隙を探し出す闘い方も頭に入れておいていいと思うぞ」

「はい、分かりました」

「しかし、走って魔法を設置する、というのは驚いたな。ランクの高い魔道士ほど、魔法に頼りすぎてしまうものだが・・・」

「僕に魔道士ランクはありませんよ？」

「闘ってみる限りAランクに届くかもしれないと思ったがね。とりあえずは接近戦の練習をしてみてもいいかもしれないな」

「わかりました！ありがとうございますっ！」

ぺこりと遙が頭を下げる。

「い、いや、別に、公式なものでもないのだからそんなに丁寧にならなくても・・・まあ、僕にも学べる所はあった。こちらからも礼を言わせてもらおうよ」

「はいっ・・・！」

闘ってみて分かった。

彼とはきつといい戦友のような、好敵手のような。そんな関係になれる、・・・そう、思った。

はじめてのひとりでのたたかい（後書き）

ごめんなさい、これ以上は長くなりますので一度切ります><

と、いう訳で戦闘オンリーでした。

ちよつと残念な出来でしょうか。

私は戦闘シーン苦手なんです！（大事

では、次回の更新も早く出来ると嬉しいです。

駄文を読んいただきましたありがとうございます、お疲れさまでした。

現地協力者・ひめみやひやるか（前書き）

凄く・・・遅いです・・・。
本当にごめんなさい。

理由としては、

環境ががが 思いつかない 複数回書き直し 漸く書き始める エ
ラーで文章の消失 泣 テイルズオブグレイセス ポケモン

おおよそんな感じでs（殴

そしてなんとこんなに時間かけておきながら今回も短いです（お前

ごめんなさい、ではどうぞですつ。

追記

小説直投稿する時はサブタイトル記入は絶対に忘れるなよ！w（自分
分に言い聞かせ

現地協力者・ひめみやひやるか

遥 side

ここからは見えないけど日本では太陽が高い位置に昇ってきた頃。信じられない速度で、リンディさんとなのはさんで、僕となのはさんの色々と織り交ざったんだかとてもすごい事情説明を高町家や学校で終えたあと、アースラの乗員さん達への自己紹介となった。

「はい、では今日からしばらく地球でのロストログア搜索・封印のお手伝いをしてもらう現地協力者を紹介します」

僕となのはさん、ユーノさん、クロノさん、リンディさん、母さんが並ぶ前にはたくさんの乗員さんが並んでいる。
き、緊張するう……。

「高町なのはです、よろしくお願いしますっ！」

「ユーノ・スクライアです。よろしくお願いします。」

次々と自己紹介を終えていくなのはさんにユーノさん。 ううう・

「ええっと、次は遥さんね。……顔色悪いけど、大丈夫？」

顔を覗き込んでくるリンディさん。その柔らかな笑みは普段なら緊張も和らぐのに、どうしてか今は余計に固まってしまう。

「みんないい人達だ、安心して話すといい」

「クロノくん、それあんまり励ましになってないの」

「は、はい・・・」

いつまでも皆さんを待たせる訳にはいかない。

・・・行こう

「ひゃ、ひゃうつ！ ひゃじめまして、ひめみやひやるかですつ！
よ、よろしくおねがいしましゅつ！？」

・・・ぽわわっ

見事に噛んでしまいました。皆さんのその温かい視線やめてくださ
い！

ニコニコしてたり息が荒くなったりなんだか乗員さんの統制が崩
れてて怖いです。

なのはさんやリンディさんエイミィさん、母さんはニコニコして
るし、ユーノさんとクロノさんは頭を痛そうにしている。

・・・どうしよう、視界が滲んできたよ・・・

なのは side

遥くん可愛すぎなの。

瞬時にレイジングハートに映像の保存を頼んでおいて正解だったの。その涙目がさらに可愛いの……！

目の前では今和みに和んだ空気をクロノくんがどうにかしようとしているのにリンディさんや薫さんを含めた乗員さんの多くが盛り上がってしまったんだか落ち着くにはすぐく時間がかりそうなの。

あ、とうとう女性の乗員さんが遙くんを抱き寄せちゃったの。う、羨ましくなんかないの。

遙くん大人気なの。とつかえひつかえに撫でられたり抱きつかれたりで遙くんが目を回しちゃってるの……。
なんだか私もうずうずしてきた……

……あ、とうとうクロノくんがデバイス取り出して強引に遙くんを引き離したの。

遙くんが抱きついて泣き出しちゃってみんなから冷たすぎる視線を受けているの。

「自己紹介は以上！艦長も薫執務官もいい加減にして下さい！」

「あらクロノくん、もう少しゆっくりしていてもいいじゃない……」

「

そう言いながらも次へ言い進めるリンディさん。

……この日から遙くんはアースラ艦内では「ひやるかちゃん」って呼ばれるようになったみたいなの。

フエイト side

「もう止めようよフエイト！管理局が本格的に動いたら勝ち目はないよ！」

「でも・・・私は・・・ジュエルシードを集めなきゃ・・・」

「あんな鬼婆に構うことなんてないんだよ！フエイトはもう十分頑張った！」

「ありがとうアルフ・・・。でも、集めなきゃいけないんだ。絶対に」

「フエイト・・・」

暗い自室。

アルフが止めようって言うてくれるのは私のことを心配してくれているからで、それはとても嬉しい。

でも・・・ジュエルシードは集めなくちゃいけないんだ。母さんのために。

・・・遙・・・もし、遙、それにあの友達になりたいって言ってた白い子と一緒にジュエルシードを集められたら。

きっと、母さんの願いはすぐに叶う。

でも、それは出来ない。

私たちがやっているのは、決して周りには正しいとは言われないことなのだから。

また立ち塞がっても、今度は私は負けない。

現地協力者・ひめみやひやるか（後書き）

文章残念で短いけど今はこれ以上は無理ですごめんなさい。

最後の部分は暗めですが、最後は一気に明るくしたい予定なのであります。

ひやるか「どうしてあんなに噛ませたのさっ！？それに名前を元に戻して！」

センスの悪い私が出来る精一杯のネタです。

ひやるか「いらなからっ！？」

駄文短文ですが、読んでいただきありがとうございました！

ひやるか「無視しないでええっ！」

魔法の訓練と重量を感じさせない少女と。（前書き）

試験も終わりましたのでそろそろ執筆したい、ということ。
当小説では全員生きて帰ろう！がテーマです（なんじゃそりや

・・・なのですが、ここにきてさてどうやってプレシア家を・・・
って感じです。

もう遅い気がしなくもないですが、チート能力によるご都合展開が
苦手な方は逃げてくださいね

では、どうぞですっ。

魔法の訓練と重量を感じさせない少女と。

遥 side

あの絶対に思い出したくない日から数日。

僕となのはさんはアースラで学校での自習をしたり魔法の勉強や練習をしたりしつつジュエルシードの探索、回収に協力していた。

何せここは地球より何十倍も魔法文化が発達している。

と言っても地球に魔法文化はないようなものなのだが。

歴史の教科書の端に載っている呪術や儀式がもし魔法だったとしてもだ。

ミッドチルダの魔法が浸透しきった文化とは違うのだ。

・・・話が逸れてしまったが、この艦内には戦闘用の魔法に特化した人、クロノさんがいるのだ。

実戦と勘に任せて成長していた部分が多いので、ちゃんとした基本が教わる事ができるのはとても嬉しい。

と、いうことで。

「さて・・・魔力の流れは安定しているな。遥、長時間一定量の魔力で魔法を行使するのは魔法の安定化を図ると共に、長時間の魔法の行使への第一歩となる」

「はい・・・クロノさん！」

展開した4個の魔力スフィアを回したり消したり数を戻したりしつつも可能な限り魔力の流れを安定させる。

「ここまでは順調だな・・・本当に素人なのか・・・？」

クロノさんが何か呟いたようだったが集中している僕には聞こえなかった。

《ひゃ、ひゃうつ！ ひゃじめまして、ひめみやひやるかですつ！よ、よろしくおねがいしましゅっ！？》

「うわあああああっ！？」

ばしゅばしゅばしゅー！

突然の記憶から早急に消し去るべきである音声が聞こえ、暴走した魔力が多数の魔力スフィアを生み出し、飛んでいく。

「・・・訓練の途中なんだがね。」

咄嗟にシールドを展開したクロノさんが言う。

「だ、駄目だよレイジングハート！そんなことしちゃっ！」

《マスターが訓練所の入り口で「遙くんの独り占めは許せないの・・・！」と仰ってましたのでつい》

「それとこれとだと話は違うのっ！？」

最近妙に人間らしくなったデバイス・レイジングハートさんの音声を聞きつつ、僕とクロノさんがため息をつく。

・・・というか、なのはさんの物真似上手だな。

「そうなら声を掛けてくれればよかったんだが・・・まあいい、遥、今日の訓練はここまででいいか？」

「はい、今日もありがとうございましたっ！」

ぺこりと頭をさげ、

「さて、レイジングハートさん。・・・何故それを？」

《薫執務官からの咄嗟の指示です。既にアースラ乗員全員へのデータ送信が完了しています》

「・・・・・・・・一撃で終わらせるっ！」

「えっ！？ちょ、ちよつと、遙くんっ！？」

「デイベイーン・・・・・・・・」

魔力が漲る。この手で呪われた歴史を修正するんだ！

「そこまでだ遥」

「うひゃっ！？」

クロノさんにバインドを張られて魔法が止まる。もうすこしだったんだけど・・・。

「全く、お前は砲撃魔法に適正が無かったんじゃないのか・・・？それとレイジングハート、お前もだ。無闇やたらに人の嫌がる事をするもんじゃない」

《以後気をつけるとします》

全然反省してないよね、それ・・・。

それにしても、何故砲撃魔法が撃てそうだったんだろう？よくなのはさんの砲撃を見ていたからかな？

それを話したら実戦で伸びるタイプか・・・とか私の魔法・・・となのはさんとクロノさんが複雑そうな表情をしていたが。

そんな時・・・

ピーッ！ピーッ！

「警報っ！？」

「艦橋に急げ！」

短いやりとりの後、僕らは艦橋に急ぐ。

「エイミィ、状況はっ！？」

到着した後、クロノさんが既にオペレーター席に座っていたエイミ
ィさんに状況を聞く。

「例の魔道師達が動き始めたよ！海上で強大な魔力反応！多分強引
にジュエルシードを起動させた！」

そして暴走を始めたジュエルシードと戦闘を始めたフェイトさんと
アルフさんの様子がモニターに映し出される。

「フェイトちゃんっ！？」

「なんて無謀なことを・・・」

ジュエルシードを数、6つ。
回収を急いでいるのか・・・？

「私達も助けに行かなきゃっ！」

なのはさんの声。

しかしそれをクロノさんが制す。

「待つんだ。あれでは放っておいても勝手に自滅するかなり削ら
れる。待った方が得策だ」

「で、でも・・・」

「私達にはジュエルシードを回収する義務があります。そのために
はこのような判断をすることもあります。辛いでしょうが、我慢し
てください」

艦長であるリンディさんに止められては、どうしようもない。
僕も助けには行きたいけど・・・

そんな時。

（転送ゲートは僕が開いた！2人とも、急いでっ！）

ユーノさんの声が念話で聞こえる。

「わわわ、転送ゲートが開かれたっ！？えええっ！？」

パニックを起こしているエイミィさんに心の中で謝りつつ、

「ごめんなさい、お叱りは後で受けます！行く、遙くんっ！」

なのはさんが僕の手を引っ張る。

「わわっ！？」

「待てっ！・・・って言っても聞かないか・・・」

諦めたようなクロノさんの声を聞きつつ、僕らは艦橋を後にした。

そして、今は転送ゲートの目の前にいるわけだが。

「その、僕飛べないんですが・・・」

正確には飛べるが、とても戦闘できる状態ではないのだ。

「大丈夫なの！」

そう言って何故か僕の背中と膝裏に手を回した後、僕を正面に抱き上げた。

「わわっ！？このままいくつもりですか！？」

暴れるが、やっぱり全くビクともしない。

「大丈夫、遥くんなら全然重たくないのっ！」

「そういう問題じゃないですっ！戦闘の様子はモニターされるんですよっ！？」

「それがどうかしたの？」

「・・・そうですか」

観念して体の力を抜く。

「転送、行くよっ！」

ユーノさんも乗り込み、ゲートが光に包まれる。

・・・あ、目、閉じてなかった・・・

強烈な光に襲われ、身悶えていた後、強烈な重力を感じた後、なのはさんに揺すられて目を開く。

既になのはさんはバリアジャケットを身に纏っている。

魔力反応によりシールウィップもバリアジャケットを展開したようだ。

正面の方向、その少し遠くには、何故か驚愕の表情に染まったフェイトさんが。

「遥・・・なにをしているの？」

目からとてつもない寒気を感じるが、とりあえずは。

「話は後ですっ！とりあえずはジュエルシードの封印をつ！」

「3人でびったり頑張ろう！」

僕なのはさんに抱かれたままんだけどびったり1人分やるんだ・・。

フェイトさんの冷たい視線は相変わらずなのはさんを貫いていたが、とりあえずはジュエルシードに向かっていったのを確認し、僕らも封印にとりかかった。

魔法の訓練と重量を感じさせない少女と。（後書き）

サブタイトルはやケになってつけました。
後悔なんて・・・してないんだからねっ！

さて、迷走しつつありますが投稿です。

今回は遥を争って2人の魔法少女の争いが・・・

遥「止めてえっ!?!」

さて、次回の更新は早くできたら嬉しいです。

駄文ですが読んでいただいてありがとうございます、お疲れ様でした。

遥「人の話を聞けええええっ!?!」

重量なんて無いんです（前書き）

1ヶ月ぶりの更新とか嘘だろ・・・？

家のPCが機能しなくなってから数週間、今回あたりから携帯も使いつつの投稿となりますので多分短くなります、ごめんなさい。

では、どうぞっ。

重量なんて無いんです

遙 side

――魔法の術式を組み上げ、発動する。

なのはさんに抱きかかえられたままではあるものの、魔法の発動とコントロールに集中することが出来たので、次々と魔力弾を放ち、暴走しているジュエルシードに命中させる。

僕には砲撃魔法などの威力の高い魔法は使えないので、魔力弾や拘束系の魔法でジュエルシードの動きを止める。

高い威力を持つ魔法が使えるなのはさんとフェイトさんのための時間稼ぎ、ということだ。

「なのはさん、フェイトさんっ！」

「うん、行けるっ！」

なのはさんの力強い返事を受け、準備が完了しているのだと理解する。

フェイトさんの方も既にバルディッシュさんをジュエルシードに向け、魔力が先端に集中している。

こちらも準備完了なのだろう。

「行くよ、フェイトちゃんっ！」

「・・・うん」

強力な魔力反応を間近で感じる。

その瞬間、2発の魔力砲撃が6つ全てのジュエルシードに命中し、一気に封印される。

・・・ジュエルシードの封印は終わった。次は、フェイトさんだ。

なのはさんは交戦する度にフェイトさんを気にしている。
やはり、何か感じる何かがあるのだろう。

「・・・フェイトちゃん」

なのはさんがフェイトさんの方を向く。

「・・・友達に、なりたいんだ」

静かに、しかし力強い言葉でフェイトさんに伝える。

「理由は、分からないよ。でも、もしかしたら手伝える事があるかもしれない」

フェイト side

心優しい子なんだ。

何度も戦った。

何度も突き放した。

それでもやつぱり、彼女の心は優しく、力強いんだ。

遥が抱きかかえられたまま出てきたときはびっくりしたけど、よく考えたら遥は飛べなかった気がする。

友達。

なれば、きつと、早いペースでジュエルシードを集められるし、彼女や遥とも一緒にいられる。

アルフと彼女の使い魔も入れて5人。きつと温かいだろう。

「駄目だフェイトっ！目的を忘れたのかいっ!？」

――そうだった。

それでは管理局側にジュエルシードを持ってかれてしまう。
それじゃあダメなんだ。

母さんの、願いを果たせない。
だから。

静かにバルディッシュを構える。

彼女は一瞬悲しそうな表情をしたけれど、すぐに決心した顔になった。

――本当に、強くなったと思う。

技術も心も、初めて出会ったあの頃とは大違いだ。

「行くよ、バルディッシュ」

《はい、行きましょう》

バルディッシュからの力強い返事。

そんな時だった。

《マスター、上空から極めて強力な魔力反応。次元攻撃だと思われます》

気がついたときにはもう遅かった。

どこか懐かしい紫の雷に体を打たれ、

「母、さん・・・」

私は意識を手放した。

遥 side

突然の次元攻撃。

かなりの短時間でここまでの威力が出るのだからかなりの魔導師だろう。

咄嗟にプロテクションを展開し、防ごうとする。

このままではなのはさんにも当たってしまう。

「う……強い……!」

しかし魔法の威力はかなりのもので、僕は耐え切れず衝撃を受け、下に落下してしまう。

見えるのは、緊急で出撃したクロノさんとアルフさんが3つづつのジュエルシードを確保し、フェイトさんを脇に抱えたアルフさんがこっちに……こっちに？

「2度も悪いけど、やっぱりフェイトにはアンタが必要なんだよ」

そんなどこか優しいアルフさんの声を聞き、僕は意識を落とした。

重量なんて無いんです（後書き）

・・・2度目のフェイトサイドへの移動です。

ごめんなさい、でもエンディングを考えるとこっちなんだ（あああ

ひっさしぶりの更新ですねえ。

本当に申し訳ないです・・・。

次回からは携帯からの更新をする努力をしてみます。

次は1か月更新なんて残念な真似はしない！・・・と思う（（

ではここまで読んでいただいてありがとうございます、駄文すみませんでしたが、お疲れ様でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6819m/>

魔法少女リリカルなのは 欠けた少年

2010年11月12日07時20分発行